

兵庫県芦屋市

## 城山遺跡（鷹尾城跡）採集遺物整理報告書

—山本正男氏・山本徹男氏による採集遺物の調査—

2023 年 3 月

芦屋市教育委員会



兵庫県芦屋市

## 城山遺跡（鷹尾城跡）採集遺物整理報告書

—山本正男氏・山本徹男氏による採集遺物の調査—

2023 年 3 月

芦屋市教育委員会



## 例　言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が令和2～4年（2020～2022）度に実施した山本正男氏・山本徹男氏による城山遺跡（鷹尾城跡を含む）における表面採集遺物の整理報告書である。
2. 城山遺跡（鷹尾城跡）は、兵庫県芦屋市城山・奥山に所在する。
3. 本書で報告する遺物が表面採集されている周知の埋蔵文化財包蔵地は、「城山遺跡」である。
4. 今回、城山遺跡（鷹尾城跡）における表面採集遺物の整理を実施するにあたり、山本徹男氏からは多大なご協力を得た。
5. 表面採集遺物の整理は、芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課文化財係長（学芸員）竹村忠洋、同係学芸員森山由香里、同係会計年度任用職員2級（学芸員）白谷朋世・西岡崇代が担当した。また、本事業に関わる事務については、同課課長岩本和加子、竹村、森山が担当した。
6. 上記した職員の他に、同係会計年度任用職員1級上田美恵子・小林久実代・小林宣子・田中菜美・松村友美が従事した。
7. 本書の編集は、竹村・森山・白谷が担当した。
8. 報告文の執筆は、白谷・竹村・森山・西岡が行った。執筆分担については、目次に氏名を掲げる。
9. 校正作業は、竹村・森山・白谷・西岡の他に、上田・小林（久）・小林（宣）・田中・松村が担当した。
10. 第10図のベースに使用した地図は、国土地理院発行5万分の1地形図「大阪西北部」（平成11要部修正）図幅を使用している。
11. 第11図のベースの地形図は、大手前大学史学研究所岡本篤志氏が作成し、大手前大学史学研究所から提供を受けた兵庫県全域数値地形図ポータル1Mメッシュ航空レーザ測量データを利用した地形図を使用している。
12. 本書を作成する過程で、下記の方々及び機関からご助言・ご教示・ご協力を賜った。ご芳名及びご機関名を記し、深く感謝の意を表する（50音順、敬称略）。

浅岡俊夫　岡本篤志　海邊博史　佐藤亜聖　鈴木重治　橘　泉　永井正浩　藤川祐作　松田　度  
森岡秀人　森下章司　山上雅弘　山本徹男　和田秀寿　大手前大学史学研究所

# 目 次

## 第1章 はじめに

第1節 山本正男・徹男氏による城山遺跡（鷹尾城跡）の採集遺物の整理に 至る経緯	（竹村）	… 1
第2節 山本正男・徹男氏による城山遺跡（鷹尾城跡）における遺物の表面 採集について	（竹村・西岡）	… 2

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境・歴史的環境	（白谷）	… 7
第2節 城山遺跡の既往報告	（白谷）	… 9
第3節 瓦林政頼と鷹尾城	（竹村）	… 13

## 第3章 採集遺物

第1節 各地区における採集遺物の状況	（竹村・白谷・森山）	… 21
第2節 採集遺物	（白谷）	… 24
第3節 小 結	（竹村・白谷・森山）	… 55

## 第4章 まとめ

第1節 鷹尾城跡に伴う遺物の年代と特徴	（白谷）	… 56
第2節 今回の整理成果	（竹村・森山）	… 57

引用・参照文献	… 59
---------	------

芦屋市文化財調査報告目録	… 61
--------------	------

報告書抄録	… 63
-------	------

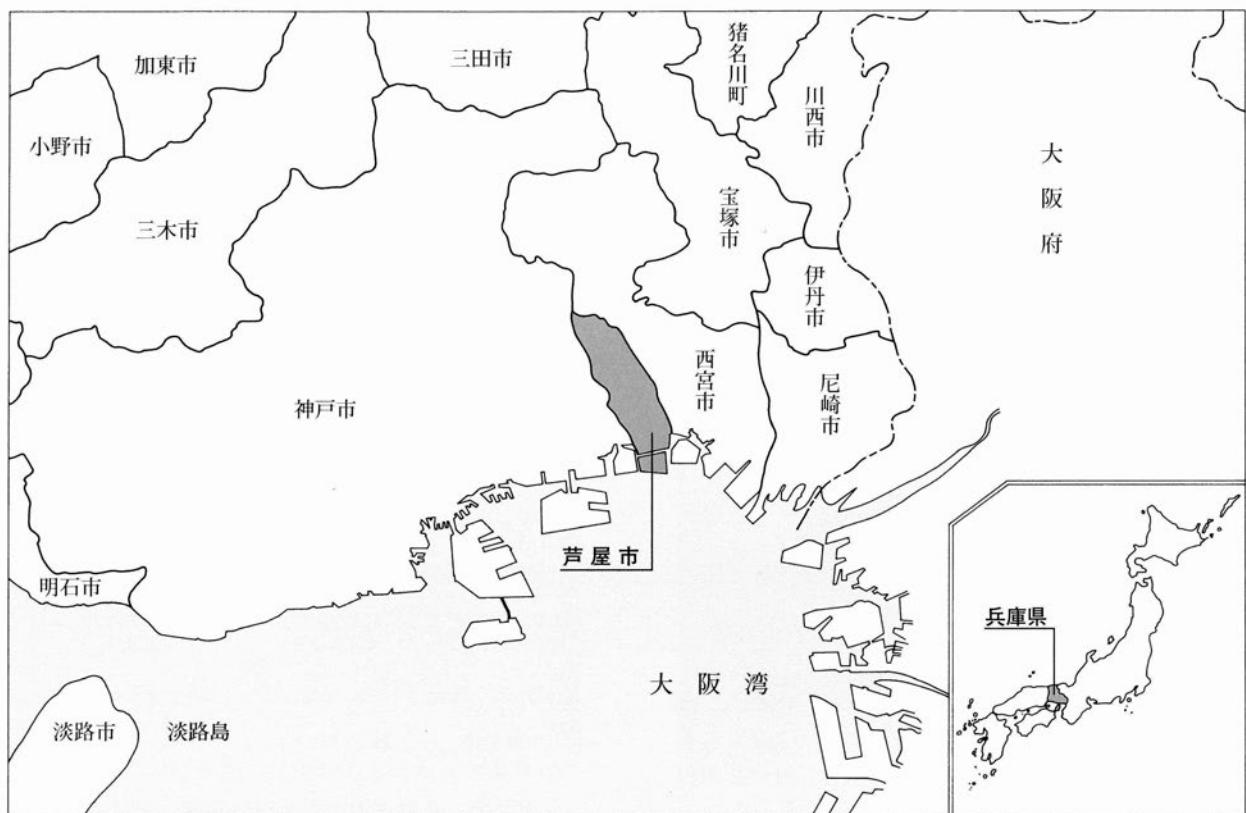
# 第1章 はじめに

## 第1節 山本正男・徹男氏による城山遺跡（鷹尾城跡）の採集遺物の整理に至る経緯

城山及び鷹尾山のある芦屋市は、兵庫県の南東部に位置している（第1図）。城山及び鷹尾山は、芦屋市城山・奥山に所在する東六甲前山山地の南端付近の山塊で（第2図）、尾根筋にある鞍部の南側の頂（標高262.1m）が「城山」、鞍部の北側の頂（標高269.8m）が「鷹尾山」である。城山及び鷹尾山には、周知の埋蔵文化財包蔵地である「徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群」がその一帯に分布しており、それと一部重なるように鷹尾城跡を含む「城山遺跡」が山頂及び尾根を中心に、「城山・三条古墳群」が中腹から南麓にかけて分布している（第10・11図）。

本書では、市内在住の山本正男氏（故人）と山本徹男氏の親子が、昭和初期に遺跡があることに気づいてから現在に至るまで、長年、城山及び鷹尾山の登山道で表面採集してきた遺物について報告する。

城山遺跡（鷹尾城跡）は弥生時代の高地性集落と室町時代の山城であるが、両氏は登山で城山・鷹尾山を通る際、登山道で弥生土器や中世遺物等の破片を表面採集してきた。両氏が採集された遺物については、昭和52年（1977）に、当時、芦屋市教育委員会の文化財担当者であった森岡秀人氏が山本徹男氏の協力を得て実物を熟覧しており、その時の所見は昭和55年（1980）刊行の『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』〔第12集〕において一覧表にまとめられている。本書の第2章第2節で記すと



第1図 兵庫県と芦屋市の位置



第2図 城山と芦屋川（南東から）

おり、その記載内容は、山本正男・徹男氏によって設定された城山遺跡の各地区（A～N・城山山頂地区）に従って両氏によって表面採集された遺物の種類等を簡潔に報告したものである（[第12集]では「地区」ではなく、「地点」としている）。

そして、今回、芦屋市教育委員会は山本徹男氏の多大なご協力を得て、令和2～4年（2020～2022）度に城山遺跡（鷹尾城跡）の表面採集遺物を借用し、整理作業及び台帳作成、実測、写真撮影等を実施した。

なお、当該整理は、芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課が整理主体である。同課文化財係長（学芸員）竹村忠洋と同係学芸員森山由香里、同係会計年度任用職員2級（学芸員）白谷朋世・西岡崇代が整理を担当し、同係会計年度任用職員1級小林久実代・小林宣子・田中菜美が補助した。

## 第2節 山本正男・徹男氏による城山遺跡（鷹尾城跡）における遺物の表面採集について

### 1. 山本正男・徹男氏による城山遺跡（鷹尾城跡）の遺物の表面採集について

ここでは、令和4年（2022）12月26日に竹村と白谷が、山本徹男氏からご教示いただいた内容をもとに、山本正男氏と徹男氏の城山遺跡（鷹尾城跡）での遺物の表面採集の概要について記す。

山本正男氏（1913－2017）は関西学院中学部に在学していたが、昭和4年（1929）に校地が現・神



第3図 山本正男氏



第4図 山本徹男氏

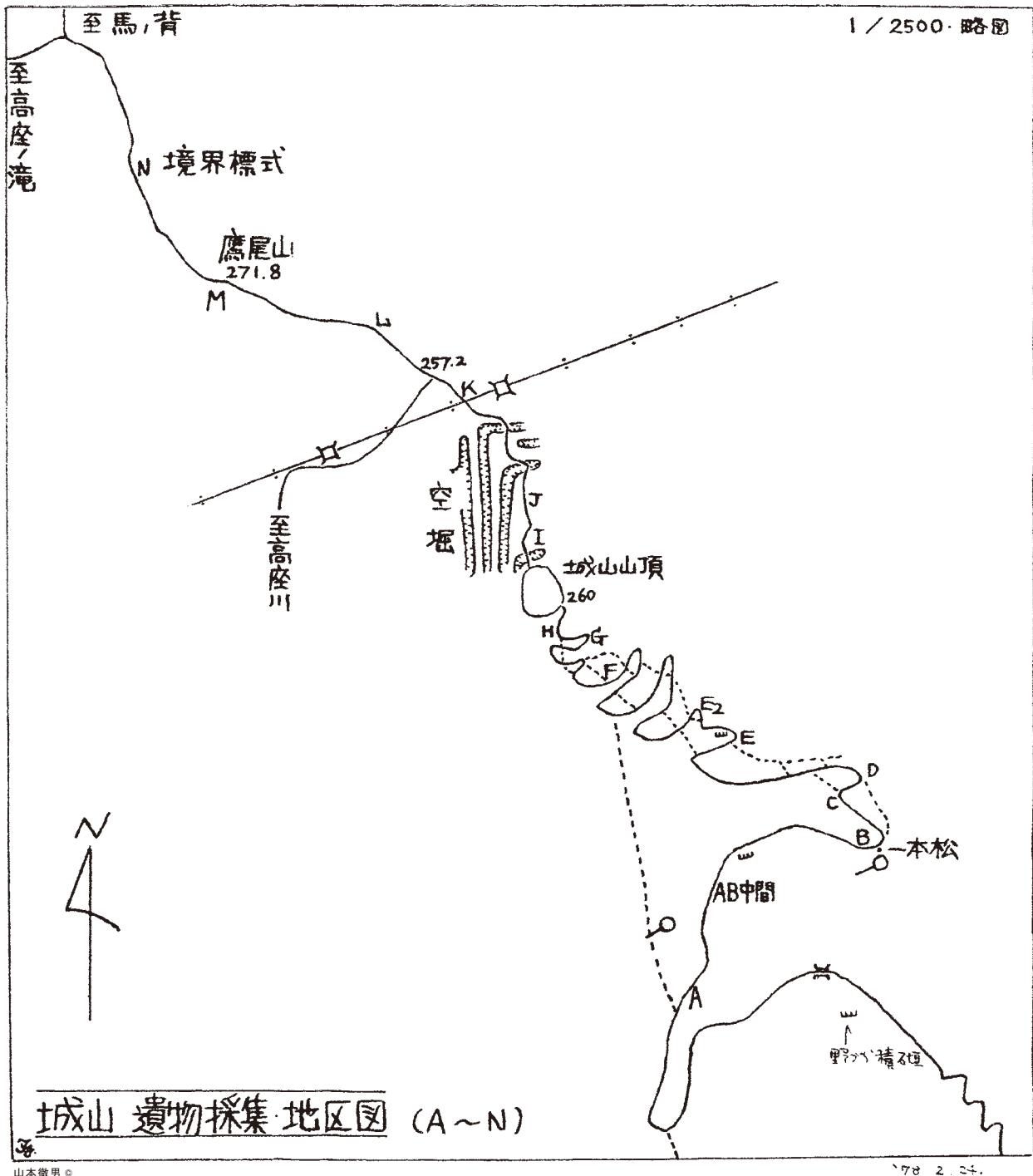
戸市灘区王子町から現在地の西宮市上ヶ原に移った。学校の外国人の教員は考古学の知識があったようで、「仁川古墳群を見に行こう」ということになり、仁川古墳群を16mm映画で撮影したのが、正男氏が考古学と出会うきっかけとなった。そして、正男氏が昭和2年（1927）頃から住んでいた武庫郡精道村字三条畦垣内（現在の芦屋市三条南町）の自宅近くにある城山の山麓にも古墳が存在していることに気づいた。また、正男氏は登山とロッククライミングをしていることから、自ずと城山と鷹尾山の登山道を頻繁に通るため城山遺跡（鷹尾城跡）に関わる遺物に关心をもつようになり、82歳頃まで現地で遺物を表面採集していたそうである。

一方、山本徹男氏（1948－）は、正男氏の長男である。3歳の時には、父・正男氏に連れられて城山山頂に登ったそうである。長じてからは、時間があれば2ヶ月に一度程度は、また、多い時は毎週、登山のために城山・鷹尾山山頂を通っており、ここ数年は週2回ほど城山・鷹尾山を通っている。

ところで、昭和31～36年（1956～1961）、芦屋市教育委員会は会下山遺跡（芦屋市三条町所在。現・国指定史跡）の発掘調査を実施したが、小学4年生だった徹男氏は、昭和32年（1957）に発掘調査の前と後に当遺跡を訪れ、写真を撮影している。そして、昭和35年（1960）4月には、芦屋市立山手中学校に入学し、歴史研究部に入部した。会下山遺跡の発掘調査には、歴史研究部の部員も参加していたが、当時、会下山遺跡の本格的な発掘調査はほとんど終了しており、部活では会下山遺跡の清掃が主な活動であった。なお、当時は、山手中学校内は会下山遺跡の出土土器がいたるところに並べられており、文化祭でも弥生土器を活用できたそうである。そのような中、山本徹男氏は城山遺跡に強い関心をもっていたことから、父・正男氏と一緒に城山・鷹尾山の登山道の地表面に落ちている遺物の採集を行うようになった。

このように、山本正男・徹男氏は考古学に関心があり、独自に城山・鷹尾山で遺物を表面採集していた。昭和52年（1977）、城山の麓にあたる山芦屋町で実施されていた山芦屋古墳の発掘調査現場で、山本徹男氏は調査担当者であった森岡氏と話した。それを機に、山本徹男氏は、森岡氏から表面採集した遺物の基本的な記録方法等について教示を受けた。その結果、山本正男・徹男氏による採集遺物に添えられた記録の内容は、格段に精度が向上し、専門的になった。特に、それまではマジックペンによる覚書等であったが、面相筆を用いてポスターカラーで遺物へ採集日と採集地区をネーミングする方法を実践しているのは、注目に値する。また、野帳や遺物を収納している封筒にも、表面採集した日付ごとに遺物の採集位置や採集状況等について詳細に記録されている（第6・7図）。なお、映像作家である山本徹男氏は、山芦屋古墳の発掘調査を撮影し、昭和54年（1979）に8mm映画作品『山芦屋古墳』を制作している。

山本正男・徹男氏による城山・鷹尾山における遺物の表面採集の点数は、森岡氏と出会った昭和52年（1977）を機に大きく増加する。当時は現在と異なり、遺物が多く落ちていたそうである。山本徹男



第5図 山本徹男氏作成の城山遺物採集・地区図（1978年2月24日作成）

この図にはないが、その後、山本正男・徹男氏はQ地区（馬ノ背）、R地区（馬ノ背・高座ノ滝の分岐点から高座ノ滝まで）を設定している。

氏は、雨水等による遊歩道の浸食が著しく、遺物の出土・流出点数が多かったことが要因と考えている。しかし、その後、山道の修理や排水溝などがつくられた結果、遊歩道の浸食が少なくなり、遺物が出土・流出することが少なくなったということである。実際、現在は、現地で遺物を確認することはほとんどない。

なお、山本正男・徹男氏は、森岡氏からの「遺物の採集はあくまで地表面に落ちているものに限り、

少しでも地中に埋まっている遺物は決して掘り出してはいけない」という言葉を守られたので、両氏が採集された遺物はすべて地表面に落ちていたものであり、地中に埋まっている遺物は決して掘り出さないことを徹底しているということである。

## 2. 山本正男・徹男氏による表面採集の方法

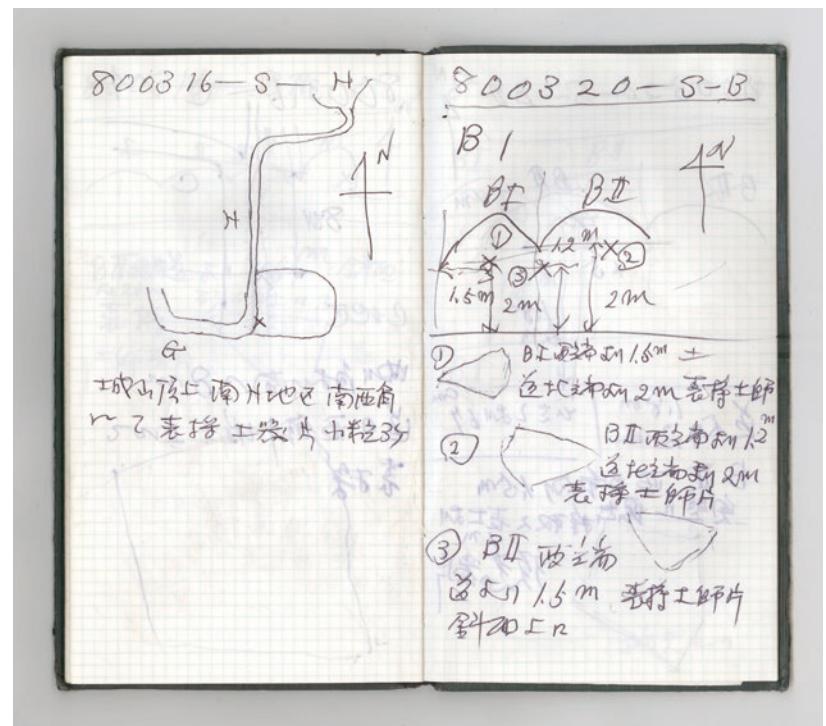
次に、山本正男・徹男氏による城山及び鷹尾山における遺物の表面採集の方法について記す。両氏は城山・鷹尾山の地形や登山道の屈曲部、鷹尾城跡の曲輪等を目印にして、A～N・Q・R・城山山頂の各地区を設定している（第5図）。その内、A地区（元は「古墳の下」と呼称）及びB地区（「南の一本松」）、城山山頂地区（「山頂」）、N地区（「北の一本松」）は、山本正男氏が設定したもので、それ以外の地区は山本正男・徹男氏が設定した。また、「鷹尾山」と「城山」を地形的に区別し、「城山」は「I尾根」と呼称していた。そして、「II尾根」の呼称は、城山山頂の送電鉄塔より北側、すなわち「鷹尾山」を指している時期と、「馬ノ背」と呼ばれる鷹尾山の尾根の登山道から高座ノ滝に下る道が分岐する場所より北側を指している時期がある。

山本正男・徹男氏は、城山・鷹尾山の登山道で遺物を表面採集する際、野帳約30冊と撮影記録のノートに採集日、採集場所や周辺の地形等、遺物の種類・点数を詳細に記録している（第6・7図）。表面採集した遺物は洗浄し、面相筆を使いホワイトのポスターカラーでネーミングをしてから、



撮影 山本徹男 ©2023

第6図 山本徹男氏が城山遺跡（鷹尾城跡）の表面採集遺物について記録してきた野帳



撮影 山本徹男 ©2023

第7図 山本徹男氏が野帳に記した城山遺跡（鷹尾城跡）の表面採集遺物の記録



第8図 山本正男・徹男氏の城山遺跡の表面採集遺物の整理状況（1）



第9図 山本正男・徹男氏の城山遺跡の表面採集遺物の整理状況（2）

採集日及び採集場所ごとに封筒等に収納されている。その封筒の表面にも、採集日と採集地区やメモの地図がしっかりと記されている。

このように、山本正男・徹男氏は、森岡氏から教示を得た考古学の遺物整理法を忠実に実践していることから、両氏の採集資料は、いつ、どこで採集されたのかを検討することができる。したがって、山本正男・徹男氏の城山遺跡（鷹尾城跡）における表面採集遺物は考古学的に資料価値が非常に高いといえる。

今回、芦屋市教育委員会では、これら山本正男・徹男氏による各種記録・注記と、山本徹男氏の説明及び確認に基づき遺物台帳を作成した。

### 3. 山本正男・徹男氏による表面採集遺物の整理方法

芦屋市教育委員会では、令和2年（2020）9月8日から令和3年（2021）7月2日まで、山本徹男氏から城山遺跡（鷹尾城跡）採集の遺物を借用し、芦屋市教育委員会生涯学習課三条文化財整理事務所で台帳作成や写真撮影、実測等を行った。山本正男・徹男氏の採集遺物は27ℓ容量のコンテナ8箱分である（第8・9図。第8図は、遺物を第9図のように並べて収納しているため、箱数が増加している）。

台帳の作成にあたっては、まず、遺物が保管されている段ボール等に通し番号（仮1～8）を付け、段ボール等ごとに、その内容（遺物が収納されている紙袋や封筒、箱などの数量や状態）を撮影し、写真で記録した。次に、封筒等ごとに登録番号を付し、封筒表面に書かれている記録等を台帳に記載した。台帳の登録番号は、1～1248である。そして、収納遺物の数量と種類の内訳を台帳に記入した。また、採集場所の地図等が記載されている封筒類は、すべて複写した。さらに、台帳等の内容を基に、採集位置と採集遺物の種類や点数を表にまとめた（第1表）。

報告書（本書）に掲載する遺物については、全体の中から器種や器形、年代のわかるものを選別し、次に図化が可能なものを73点抽出して、実測・探拓・写真撮影を行った（第20～47図1～73）。また、遺跡の内容を検討する上で重要であるが、図化が困難なもの116点については、種類別に写真撮影を行った（第48～66図74～189）。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境・歴史的環境

#### 1. 地理的環境

芦屋市城山・奥山に所在する城山及び鷹尾山は、六甲山地（標高 931.3 m）の南東部にある尾根の先端に位置する。東側を芦屋川が流れ、西側を流れる支流の高座川は城山の南で芦屋川と合流する（第 10・11 図）。このうち、尾根筋にある鞍部の南側の頂（標高 262.1 m）は「城山」、鞍部の北側の頂（標高 269.8 m）は「鷹尾山」と呼ばれている。

六甲山地の東部は、約 7000 万年前の中生代白亜紀後期に固結した花崗岩類（六甲花崗岩・布引花崗岩など）を本体としており、部分的に中生代トリアス紀やジュラ紀（約 2 億年前）に形成されたと考えられる地層（丹波層群相当層）が残っている〔芦屋市役所 1971、田中編 1988 等〕。また、南斜面から南麓にかけて、花崗岩類の上に、新生代第三紀鮮新世から第四紀更新世（300～15 万年前）にかけて堆積形成された大阪層群が堆積している。

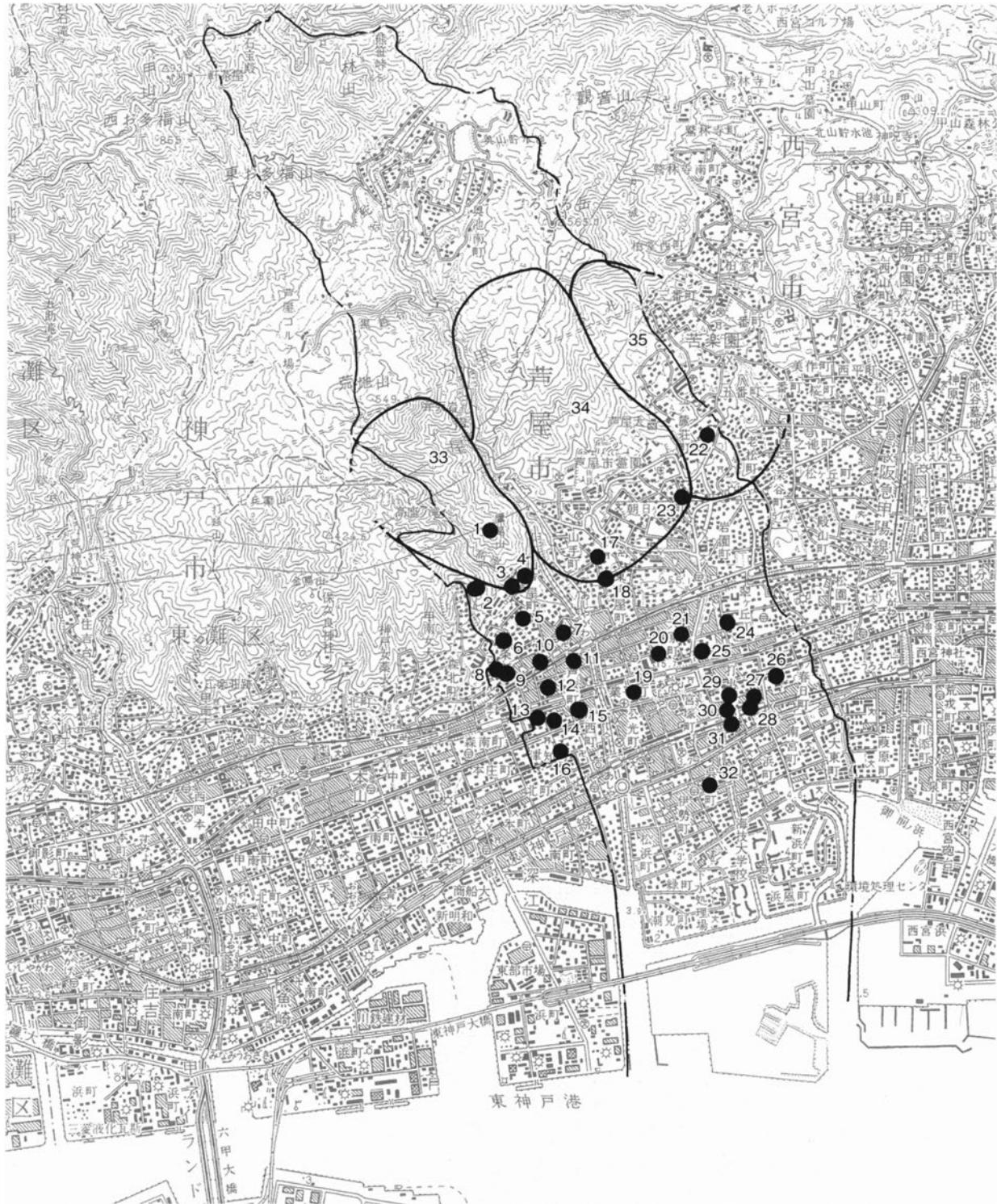
大阪層群の形成後、今から約 100 万年前頃に「六甲変動」と呼ばれる六甲山の隆起が始まり、活断層の活発化とともに急速に隆起が進んだ結果、現在の山体を形成したと考えられている。なお、六甲山地には北東一南西方向の断層が多く確認されており、特に南東側の横ずれ断層（甲陽断層・芦屋断層・五助橋断層・大月断層・諏訪山断層・須磨断層）が地形形成に及ぼした影響は大きい。このうち、芦屋断層は城山付近を通っており、このような断層運動により、六甲山地南斜面は極めて急斜面となっている。そして、六甲山地南麓には、北から順に、洪積台地、扇状地、海岸低地が広がっている。

さて、城山及び鷹尾山を含む山塊は、北東一南西方向を軸に横たわっており、城山及び鷹尾山の位置する尾根付近で最も大阪湾が迫っており、平野部が狭くなっている。このため、市街地と非常に密接しており、また低山である六甲山地の中でもひときわ標高が低いことから、城山・鷹尾山への登山を日課とする人も少なくない。また、後述する城山山頂からは神戸市域東部や六甲アイランドを含む南西方向、K 地区からは西摂平野だけでなく、千里丘陵や北摂の山々、生駒山地や葛城山、金剛山に囲まれた大阪平野まで一望できる、非常に眺望に優れた場所に立地している（第 14・15 図）。

#### 2. 歴史的環境

城山及び鷹尾山には、その立地条件から、様々な時代の遺跡が重なり合って分布している。周知の埋蔵文化財包蔵地名は「城山遺跡」と「城山・三条古墳群」、「徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群」である〔第 12・16・24・40 集〕（第 10・11 図）。

城山遺跡は、弥生時代中期後半から後期前半の高地性集落〔村川・森岡 1976a、森岡 2021、森岡・祭本 1985、第 12 集〕及び、室町時代後期（16 世紀）の鷹尾城跡〔角田 1981・2011、山上 1982〕である。鷹尾山山頂付近から、城山南斜面の標高約 150 m 付近までを範囲とするもので、東西約 250 m、南北約 450 m、比高差約 120 m を測る。なお、城山及び鷹尾山の南西、高座川が流れる谷を挟んで対岸の尾根先端部には、城山遺跡と同時代の高地性集落である国指定史跡会下山遺跡（標高約 200 m）が立地する〔芦屋市教委 1964・1985、第 3・8・85 集〕。



- |                 |             |                      |
|-----------------|-------------|----------------------|
| 1 城山遺跡          | 13 六条遺跡     | 25 久保遺跡              |
| 2 会下山遺跡         | 14 清水遺跡     | 26 堂ノ上遺跡             |
| 3 三条古墳群・山芦屋遺跡   | 15 前田遺跡     | 27 金津山古墳             |
| 4 城山古墳群・芦屋川水車場跡 | 16 津知遺跡     | 28 小松原遺跡             |
| 5 冠遺跡           | 17 芦屋神社境内古墳 | 29 打出小槌古墳            |
| 6 三条会下遺跡        | 18 藤ヶ谷遺跡    | 30 打出小槌遺跡            |
| 7 西山町遺跡         | 19 業平遺跡     | 31 若宮遺跡              |
| 8 三条岡山遺跡        | 20 大原遺跡     | 32 吳川遺跡              |
| 9 三条九ノ坪遺跡       | 21 打出岸造り遺跡  | 33 德川大坂城東六甲採石場城山刻印群  |
| 10 芦屋廃寺遺跡       | 22 八十塚古墳群   | 34 德川大坂城東六甲採石場奥山刻印群  |
| 11 月若遺跡         | 23 朝日ヶ丘遺跡   | 35 德川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群 |
| 12 寺田遺跡         | 24 阿保親王塚古墳  |                      |

第10図 芦屋市内主要遺跡分布図 1／50000

城山・三条古墳群は、古墳時代後期から終末期の群集墳で、城山南斜面から南麓にかけて、高座川西岸を含む形で点在する〔瀬川・森岡 1987、森岡 1981a・1986、第 12・14・65・71・77・104・107・112 集〕。山芦屋古墳や旭塚古墳、城山 3 号墳をはじめ、巨石墳・終末期古墳・多角形墳などが知られる〔武庫川女子大 1984、第 12・77 集〕。武器や馬具の副葬が顕著で、竈形土器をもつ古墳も認められ、渡来系氏族と関係する可能性が考えられている。

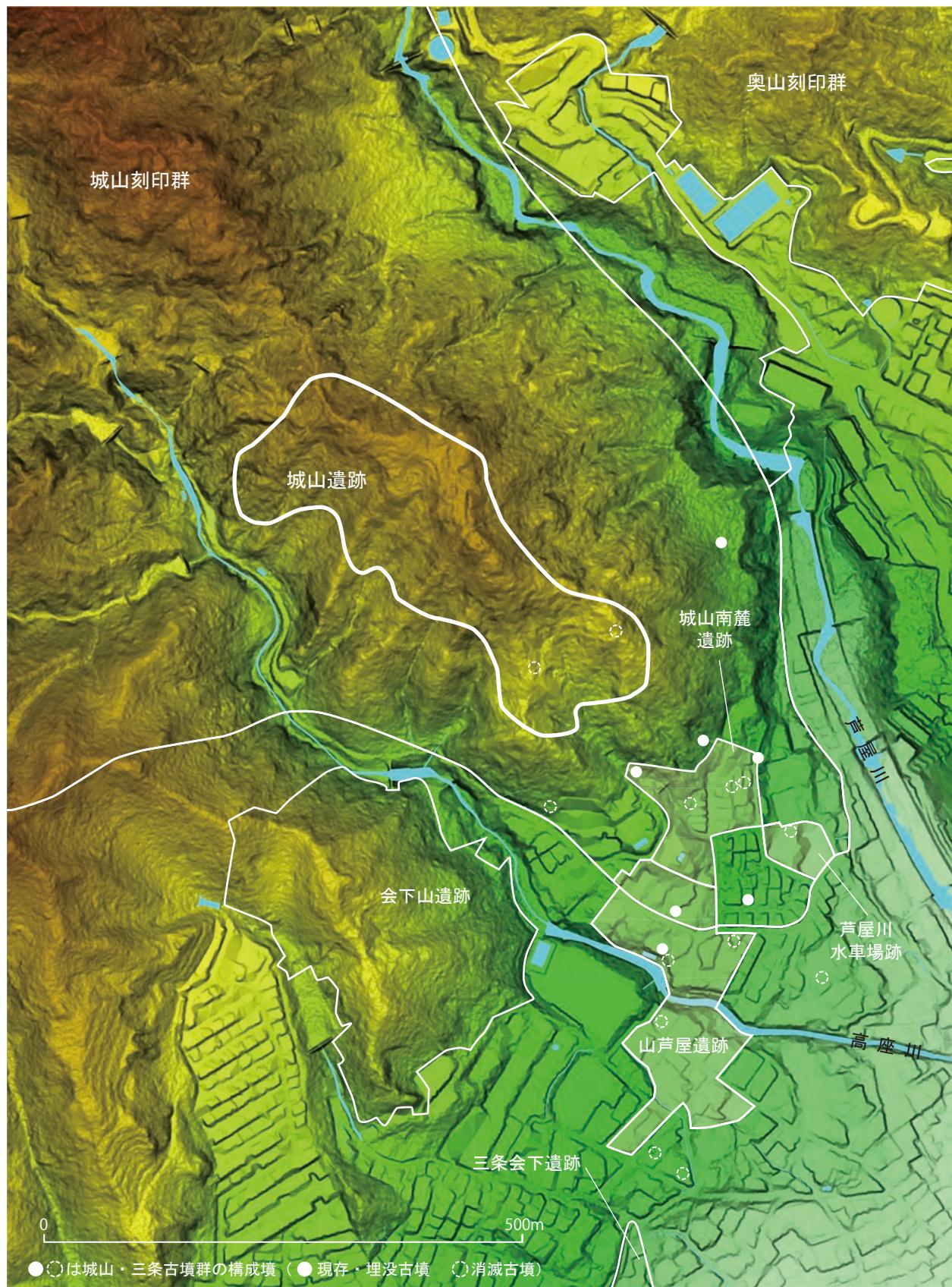
徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群は、江戸時代初期（1620 年代）の徳川大坂城築城期の採石場（石切丁場）跡である〔第 12・16・24・40 集〕。その範囲は、鷹尾山山頂から北北西 1.2 km に位置する荒地山山頂付近から城山の南麓までで、東西 1.0 km 以上、南北約 1.6 km、比高差約 500 m に及ぶ（一部神戸市域を含む）。尾根上や谷筋に採石遺構や刻印石、割石が残存しており、日向佐土原藩島津家、豊後臼杵藩稻葉家、丹波福知山藩稻葉家と推定される刻印石がみつかっている〔兵庫県教委 2008、第 60・64・78 集〕。

また、城山南麓には、縄文時代・弥生時代・室町時代の複合遺跡である山芦屋遺跡（標高約 70～100 m）〔網干・米田・山口 1985、関西大学山芦屋遺跡発掘調査団 1983、森岡 1981b・1981c・1985a、第 27・79・103 集〕、弥生時代中期及び室町時代の遺構・遺物がみつかっている城山南麓遺跡（標高 85～110 m）〔村川・森岡 1976b、森岡 1985b、第 14・84 集〕、江戸時代後期から大正時代の芦屋川水車場跡（標高 67～81 m）〔第 71 集〕の分布が周知されている。

ところで、鷹尾城は、山城と平城を含めて呼称する場合と、山城を「鷹尾山城」、平城を「芦屋城」と区別して呼称する場合がある〔角田 1981〕。これについて、鷹尾城が築かれた城山の麓の台地に立地する城山南麓遺跡において、室町時代の遺構・遺物が検出されていることに注目したい。城山南麓遺跡における既往調査で検出した中世の主な遺構を列挙すると、A 地点では中世墳墓 4 基、礎石建物 1 棟〔第 14 集〕、B 地点では礎石建物 1 棟〔第 14 集〕、C・D 地点では礎石建物 1 棟、石敷遺構 1 基、配石墓群、土坑墓 1 基、焼土坑 7 基、焼土面 1 ヶ所〔第 65 集〕、E 地点では焼土溜まり、ピット 3 基、K 地点では石積遺構、焼土坑 3 基、焼土面〔84 集〕がある。これらは、出土した土師器皿等の年代から鷹尾城と同時期と比定できることから、鷹尾城と何らかの関係があると推測する。

## 第 2 節 城山遺跡の既往報告

城山遺跡は、先述したように弥生時代の高地性集落と、室町時代の鷹尾城跡という、2つの時代と性格の異なる遺跡が重複している。このうち、高地性集落については、芦屋市教育委員会が昭和 33 年（1958）と昭和 53 年（1978）に試掘調査等を実施している。また、平成 12 年（2000）度には、兵庫県教育委員会によって、確認調査が実施されている〔山本 2001〕。一方、鷹尾城跡については、昭和 52 年（1977）度の国庫補助事業として分布調査を実施し、「分布調査台帳」を作成している。その成果が昭和 55 年（1980）に『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』〔第 12 集〕として刊行されているが、発掘調査は行われたことがない。そのため、芦屋市教育委員会が所蔵している鷹尾城跡に関わる遺物は極めて少ない。しかし、第 1 章で記したとおり、市内在住の山本正男氏（故人）と山本徹男氏親子による膨大な表面採集資料が存在していたことから、〔第 12 集〕では、両氏の採集資料に基づいて、鷹尾城跡に関わる記述がなされている。したがって、ここでは、昭和 33 年（1958）と昭和 53 年（1978）の試掘・確



第 11 図 城山遺跡周辺遺跡分布図 1/6000

認調査内容と、〔第12集〕や「分布調査台帳」の記録をまとめた。

昭和33年（1958）の試掘調査では、鷹尾山・城山の尾根5ヶ所にトレンチを設定しており、送電鉄塔以北の尾根上鞍部に設定した第4・5トレンチから弥生土器片が出土している。山道よりやや東側に設けた第5トレンチでは、竪穴建物の柱穴らしい円形の遺構を検出している。弥生土器は、畿内第Ⅲ様式から第V様式前半頃のものが認められるが、第IV様式のものが主体を占めると報告されている〔村川1959、村川・森岡1976a〕。両トレンチの周辺では土器片の散布が著しく、集落跡の存在が推定できるといった記述もある。なお、第4・5トレンチやその周辺は、概ねK地区に相当する。

また、昭和53年（1978）には、N地区西方緩斜面端に位置する崖地形において、遺物包含層の露頭が確認されたことで、発掘調査が行われた結果、竪穴状の遺構の存在が推定されている〔森岡・祭本1985〕。この地点では、合計119点の弥生土器片が採集されており、その内訳は、壺68点、甕29点、鉢1点、高杯7点、不明14点で、胎土から中河内産の搬入土器と考えられるものが39点あったと報告されている。しかも、中河内産の搬入土器は、高さ50cmを越える可能性のある大型品が主体であることから、内容物を運ぶための容器として城山遺跡に持ち込まれたことが推測されている。また、畿内第IV様式のものも認められるが、畿内第V様式前半のものの方が多く、弥生時代中期後半から後期前半の土器と考えられている〔森岡2021、森岡・祭本・佐伯1985〕。

〔第12集〕では、「城山遺跡」として広範囲を一まとめに括るのではなく、標高の低い南側から標高の高い方へと順に、「城山A地点」「城山A—B地点」「城山B地点」「城山C地点」「城山D地点」「城山E地点」「城山F地点」「城山G地点」「城山H地点」「城山山頂」「城山I地点」「城山J地点」「城山K地点」「城山L地点」「城山M地点」「城山N地点」と、登山道や平場、空堀等を目安とする山本正男・徹男氏の地区設定に依拠した範囲を、個々の埋蔵文化財包蔵地として登載している。この方針は、昭和63年（1988）と平成5年（1993）の「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図」でも踏襲されており、「城山遺跡群」という扱いであった〔第16・24集〕。各地点を統合して「城山遺跡」として「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図」に記載するようになったのは、平成13年（2001）からである〔第40集〕。

〔第12集〕では、地点ごとに、立地・遺構・遺物・現状・時代を「遺跡地名表」にまとめている。それと合わせて、「II 地区別要説」において、「城山山腹及び山脚の緩斜面は、古墳時代後期の城山南麓群集墳の構成墳が新たに確認されつつあり、…（中略）…山腹にかけても過去、横穴式石室墳の遺存が伝聞されており、標高190mを越える急斜面地にもかつて1基存在したことが確実視されている。」「城山の山頂部南斜面から尾根筋にかけては、遺物散布地が点々としている。時代別に概括すると、弥生式土器の散布は頂上以北の各地区（I～N）に濃密で、とくに送電鉄塔直下のK地区と鷹尾山最高峰から馬ノ背へ至るN地区が中心である。…（中略）…地表下に遺構を伴う可能性が強い。須恵器の散布はこれと対照的にE地区を北限とし、先に述べた後期古墳の分布とほぼ見合うようである。」「古瓦・土師器・陶器・磁器など中世の遺物は、L地区以南の全域から採取でき、時期的には室町時代後期に比定できるものが多い。これらは、I地区からK地区にかけて遺存する空堀などかつて存在したとされる鷹尾城に関わる資料と推定されるが、熱変成を受けた多数の壁土塊をみた他は、とくに土塁・石垣など城砦関連遺構を見出すことはできなかった。」と全体の様相がまとめられている。

各地点では、「城山A地点」は、標高170～190mの尾根鞍部及び背後の急斜面で、「南北約50mの範囲に（遺物が）散布する。」と記されている。また、昭和4年（1929）に山本正男氏の踏査で横穴式石室墳の存在が確認され、昭和17年（1942）に写真が撮影されていたが、この古墳は、分布調査時には、

消滅していたとのことである。「城山A—B地点」は、標高184m前後の支尾根緩斜面・谷間で、「登山道に沿って長さ35mほどの範囲に遺物が散布する。」と記されている。「城山B地点」は、標高195m前後の支尾根中腹突端部で、「東西約40m、南北約25mの範囲に遺物散布。通称“中腹の一本松”に連接して1基の横穴式石室があったというが、現存しない。」「城山山頂から東南方に派生する支尾根上の独立突端部にあり、先端（南端）部には若干の平坦面がある。」と記されている。なお、大正年間の名所絵葉書には、松の木の根とともに石室の一部が写ったものがあって、分布調査時には、この松の木が現存していた。

「城山C地点」は、標高198m前後の支尾根上だが、「流出堆積の様相を呈するが、その根源は不詳。遺跡範囲は局部的で不確定。」と記されていて、登山道に沿って、遺物が散布していたようである。「城山D地点」は、標高202m前後の尾根上で、「10m余の幅をもつ人工的平坦面を認める。」とある。また、「尾根稜線上に位置する稀薄な散布地。平坦面は遺物の散布範囲とおよそ合致する。」という記述もある。「城山E地点」は、標高210～220mの尾根上緩斜面で、「人工的平坦面を認める。」「局部的に遺物が濃厚に散布」と記されている。一方、「城山F地点」は、標高244m前後の尾根上で、「登山路に沿って極めて稀薄な遺物の散布を認めるにすぎない。」とある。「城山G地点」は、標高252m前後の尾根傾斜面で、「山頂からの流出層と考えられる」「稀薄な散布層が認められる」地点である。「城山H地点」は、城山山頂西側の標高255m前後の傾斜面上で、「登山路小径に沿った地域とその西方の傾斜地で、遺物が採集されている」と記されている。

「城山山頂」は、標高260mの山頂尾根上で、「遺跡範囲は東西約15m×南北約15m。」である。また、「焼土塊は地中に集積して埋もれ、包含層の状況を呈している」ともある。山頂部平坦面の南西側に、昭和45～46年（1970～1971）頃、サンテレビジョンの「山芦屋中継放送所」が設置されており、設置時に削平を受けた可能性が指摘されている。山頂尾根上の「城山I地点」と「城山J地点」は、「遺跡範囲不明」ということだが、前者は標高260m前後で、「山頂尾根に稀薄な（遺物の）散布が認められる」、後者は標高262m前後で、「登山道をはさんで両側に若干の遺物が散布する」と記されている。「城山K地点」は、標高258m前後の山頂尾根鞍部西斜面で、「日当たりのよい西向緩傾斜地に弥生土器片がかなり濃密に分布しており、「西の谷間にかけて約20mの範囲に広がっている」と記されている場所で、〔第12集〕では「城山弥生遺跡の中核」と指摘されている。「城山L地点」は、標高260～264mの山頂尾根東南端で、「南向斜面地に立地し、20m四方程度に遺物が稀薄に散布する。」と記されている。「城山M地点」は、標高266～270mの鷹尾山山頂部一帯で、「山頂部の荒地で、尾根上の小径を中心とした一帯で主として弥生土器片の散布をみる。」「尾根上約25mの範囲に（遺物が）散布する。」と記されている。また、「北の一本松」が生えている場所もある。「城山N地点」は、標高254～269mの山頂尾根上で、「登山道の両側に南北50mの範囲で弥生土器ばかりが散布する。」と記されている。

このような城山遺跡だが、M地区周辺には徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群に関連する割石が点在していたり、K地区のすぐ東側には、令和2年（2020）度に建て替えられたが、大正期に送電鉄塔が建設されており、近世・近代の地形改変が想定できる。

### 第3節 瓦林政頼と鷹尾城

#### 1. 細川京兆家の内紛と瓦林政頼

本書で報告する城山遺跡には、鷹尾城跡が含まれている。これは、摂津の国人である瓦林対馬守政頼（瓦林は「河原林」、政頼は「正頼」とも書く）によって永正8年（1511）頃に築かれた中世山城である〔角田2011〕。ここでは〔有坂1971a、家塙2008、角田1981・2011、中西2019、西宮市役所1959、野田2010〕を参考にして、細川京兆家の内紛と瓦林政頼について記す。

瓦林政頼が活躍した室町時代後期の摂津国（有馬郡を除く）は、その守護が細川京兆家（惣領家）で、畿内とその周辺地域を一族で押さえていた。また、摂津国は西国街道が貫いており、京都を押さえる上で重要な位置を占めていた。摂津国では、14世紀半ば～15世紀半ば頃に、古代令制下の「郡」とは別に、「上郡」「下郡」「闕（欠）郡」と呼ばれる新たな地域呼称が成立していた〔中西2019、野田2010〕。「上郡」は摂津国北部（島上郡、島下郡）、「下郡」は摂津国西部（豊島郡、川辺郡南部、武庫郡、菟原郡、八部郡）、「闕郡」は摂津国南部（神崎川以南、現在の大坂市にほぼ相当。東成郡、西成郡、住吉郡）に該当する。なお、これらに含まれない摂津国の能勢郡、有馬郡、川辺郡北部は、「北郡」と呼ばれていた〔中西2019〕。これらの内、芦屋市域は下郡内に位置する。

摂津国では、上郡は京都に居住する細川京兆家当主が重視していたために守護の影響を受けやすく、一方の下郡は守護に対して自立性の強い国人が力を振るった。このような中、瓦林政頼は武庫郡瓦林（西宮市）を拠点とする下郡の有力国人で、現在の尼崎市から芦屋市一帯に勢力を張っていた。なお、下郡の有力国人としては、瓦林氏の他に池田氏（現在の池田市を本拠とする）、伊丹氏（現在の伊丹市を本拠とする）がいた。

永正4年（1507）6月23日、京兆家当主の細川政元が、有力内衆によって京都自邸の湯殿で殺害された。これを機に、細川政元の養子である細川澄之（前関白九条政基の子。有力内衆が支持）と細川澄元（阿波守細川義春の子。阿波の有力国人三好之長が支持）が家督をめぐって抗争が起こり京兆家は分裂、細川政元殺害の翌日には細川澄之が家督の座についた。

しかし、同年8月1日には、細川澄元は、細川氏庶流の細川政賢（典厩家）と細川尚春（淡路守護家）、一度は政元の養子にもなった細川高国（備中守護細川政春の子）らの支持を得て京都に攻め上り、細川澄之と有力内衆のほとんどを討ち取って家督を継承した。この細川澄之と細川澄元の抗争時には、有力内衆が細川澄之を擁立したのに対して、瓦林政頼を含む下郡の国人衆は四国勢の推す細川澄元の下に結集した。

翌永正5年（1508）4月には、細川高国が細川澄元と三好之長を攻め落とし、將軍足利義尹から家督が認められることによって、細川京兆家の分裂抗争に一応の終止符が打たれた。この時、瓦林氏は細川高国方で、同年5月には、足利義尹の上洛にあたって池田貞忠が池田城に籠って抵抗した際、三宅・伊丹氏らとともに細川高国方諸将として攻撃している。

永正8年（1511）頃、瓦林政頼は居館が豊島郡にあったが、阿波の細川澄元が京に上るのを抑えるため、城山に鷹尾城の築城をはじめた〔角田2011〕。また、この城を根拠として、交通上の要衝であり、肥沃な灘筋を制圧しようとしたのである〔有坂1971a〕。これに対して、それまで不仲であった灘五郷の本庄衆（現在の芦屋市から神戸市中央区の中央部あたり）と西宮衆がにわかに和解し、鷹尾城築城に反発した。当時の灘五郷は、公家領（非武家領）であったため守護の支配が及びにくく、多くの土豪や地侍

(小規模な武士) が広範に成長しており、また、細川澄元方が多かった。

そのような中、同年5月1日、瓦林政頼は鷹尾城より20名程の討手によって先制して夜襲をかけ、灘五郷の中心人物であった瓦林氏一族の足高（是高とも）某と、反撃した本庄衆数名を討ち取った。そして、敵対した本庄衆に対して「今後、鷹尾城に外堀を掘削したら用水を樋でかけよ」と命じた。このような田畠の用水を取り上げられる命令に、本庄衆は無論応じることはできず、5月6日にはかえって本庄衆二千余人が大挙して鷹尾城を取り囲んだ。しかし、逆に瓦林政頼の弟の吹田又五郎や一族の瓦林四郎二郎ら23名が本庄衆の中に突入し、本庄衆側の河島の浜兄弟や今西又座牧庵らを討ち取り、本庄衆の寄手を潰走させた。

阿波に落ちのびていた細川澄元はこれを知り、細川尚春を遣わして深江（神戸市東灘区）に陣取らせ、7月26日には瓦林政頼の拠る鷹尾城の麓で芦屋河原の合戦となった。それに対して、京都から応援に駆け付けた細川高国・馬廻衆が優勢で、細川尚春方の淡路衆の首100余を討ち取った。

しかし、8月には、細川澄元の要請を受けた赤松義村率いる播磨勢が着陣し、再三にわたり鷹尾城を取り巻いて攻勢した結果、8月10日夜、瓦林政頼らは密かに鷹尾城を捨てて伊丹城に逃れた。その際、播磨勢は鷹尾城に火をかけ、次いで伊丹へ進出した〔有坂1971a〕。8月16日には將軍足利義稙（義尹から改名）や細川高国・大内義興らが丹波へと逃れている。しかし、ほどなく8月24日には、細川高国と大内義興は京都に突入し、船岡山（京都府京都市北区）での合戦で細川澄元・三好之長が大敗、阿波へ撤退した。この細川澄元・三好之長の大敗を受けて、伊丹城を攻めていた播磨勢も退却したので、瓦林政頼は再び鷹尾城へ戻った。

この船岡山の戦いの後、細川高国は播磨や四国方面からの攻撃に備えて芥川山城を築き、以後、この山城が摂津国の守護所となった。一方、瓦林政頼は、永正12年（1515）頃、西国街道沿いに越水城（西宮市）を築き、そこに居城した〔中西2019〕。この城では、月次連歌や古典の講義もなされていた。越水城の築城後、鷹尾城は支城として与力の鈴木与次郎に守らせた。

永正15年（1518）3月7日、細川高国と対立した足利義稙が阿波へ移ったため、細川高国は足利義晴を第12代將軍とした。永正16年（1519）には、細川澄元が阿波で三たび挙兵し、同年11月6日には細川澄元・三好之長勢が兵庫に到着、瓦林政頼のたてこもる越水城を包囲した。そこで、11月21日、細川高国は山城・摂津・丹波の諸勢を率いて京都を発ち、池田城を本営として越水城を助けようとした。そして、12月2日には細川澄元・三好之長勢と対峙し、その後、両軍は尼崎と西宮の間でたびたび合戦を続けたが、年を越えても勝敗は容易に決しなかった〔有坂1971a〕。しかし、永正17年（1520）2月3日夜半になって瓦林政頼は越水城を捨てたため細川澄元勢が優勢となり、2月16日、尼崎・長洲での合戦に敗れた細川高国は近江へ没落した。こうして2月26日には三好之長が入京し、細川澄元は3月16日に伊丹城に入った。同年4月には、細川澄元が將軍足利義稙から細川京兆家の家督を認められた。

しかし、永正17年（1520）5月5日には、近江守護六角定頼の軍勢を従えた細川高国が京都に攻め入り、細川澄元勢は敗北。三好之長は、知恩院で自刃した。細川澄元も伊丹から阿波に逃れたが、同年6月10日に病死した。

そして、永正17年（1520）10月14日には、瓦林正頼は、越水城を細川澄元勢に開いたとして、細川高国に命じられ京都で切腹した〔有坂1971a〕。越水城を死守せずに開城したことが、細川澄元に通じたものと疑われたことが理由であろう。

その後、細川高国は、大永元年（1521）に管領となって全盛を極めたが、細川晴元（細川澄元の遺児）と三好元長（三好之長の孫）と争うこととなり、享禄4年（1531）6月に敗退し、尼崎の広徳寺で自刃した（大物崩れ）。その結果、細川晴元が京兆家当主となったが、すでに細川氏は衰えており、やがて家臣の三好元長の子・長慶の時代に移っていくのである。

なお、瓦林政頼と鷹尾城にまつわる悲哀な物語として、「松若物語」が知られている。そのあらすじは、次のとおりである。

勢力の強くなった瓦林政頼に降参を申し入れてきた細川澄元方の地侍の一人に河島兵庫助という者があった。政頼は彼を厚遇して鷹尾城を守らせた。兵庫助には松若という16歳の息子がいたが、とても賢くて歌道に長けていた。瓦林政頼も歌を作ることでよく知られており、松若を居城の越水城で側近として召し使った。ところが、「兵庫助は敵に内通しているらしい」という噂が広まった。松若はこのことを鷹尾城にいる父に早く知らせなければ父の命が危ないと思い、密かに越水城を抜け出して鷹尾城に向かったが、すでに父は捕えられていた。城山から煙が流れているのを見た松若は、「父は自害した。もはやこれまで」と逃げることを諦め、親戚の今西将監を通じて政頼への取次ぎを頼んだ。これを聞いた政頼はたいそう不憫に思い松若を助けようとしたが、家臣から「このような賢い若者であれば、将来父の仇を討とうとする恐れがあります。助けることはなりません」と強く言わされたため、やむなく松若は西宮の六湛寺で自害させられることになった。辞世に「父に我つかふ願も三瀬川ともに越ゆべき道のうれしさ」の一句を残した。これは、『瓦林政頼記』（別名『松若物語』。成立年未詳）に記された史実に近い悲話である。

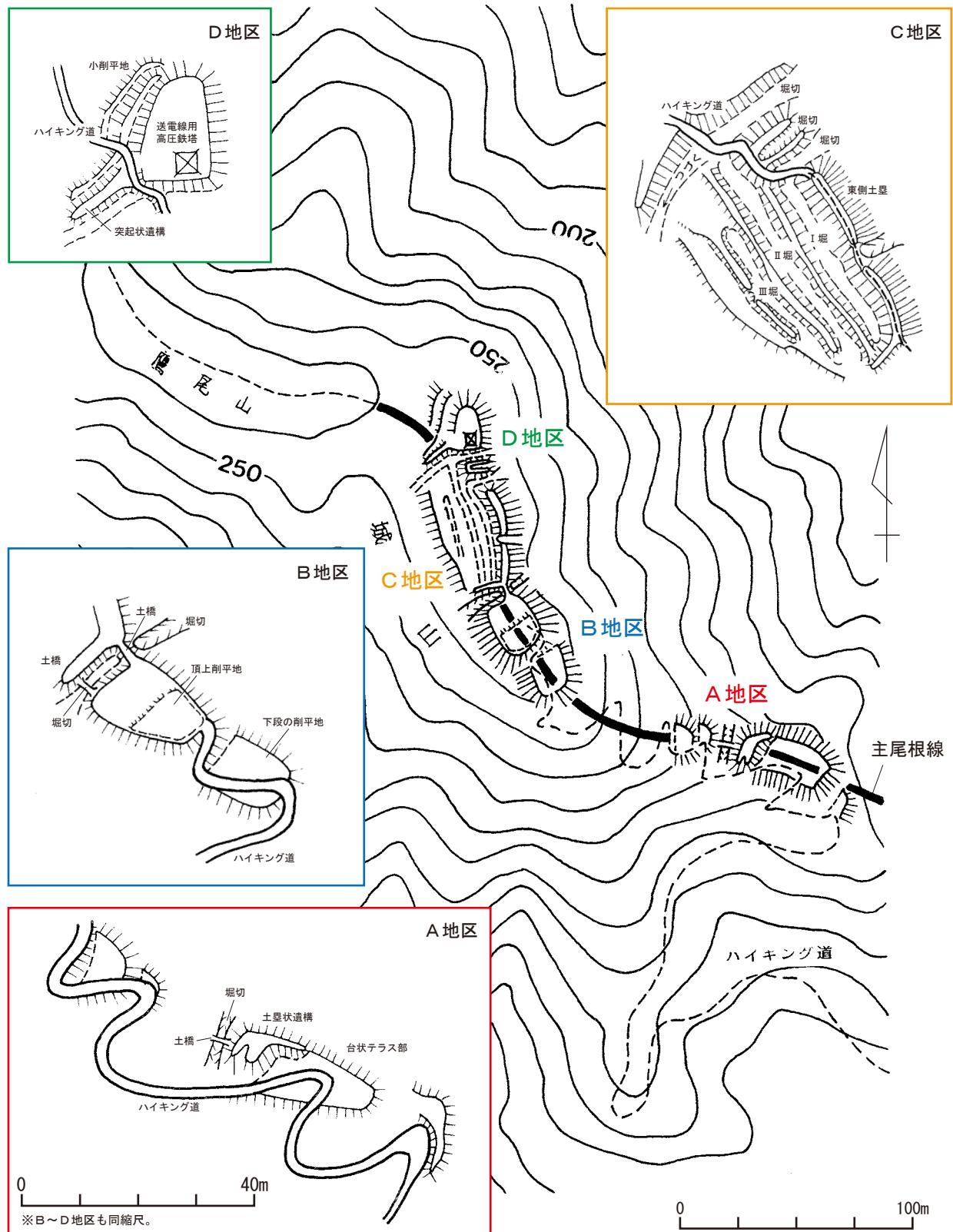
なお、同書には、瓦林政頼が越水城の築城中も連歌を興行し、夜ごとに古文を学び道をたずね、文武二道を嗜む人であったことが記されているが、連歌だけでなく、かなりの教養を積んだ人物であったようである〔有坂 1971a〕。瓦林政頼が連歌に優れていたことについては、政頼の歌詠が宗祇の撰した『新撰菟玖波集』にも収録されていることからも知ることができ、宗祇や公卿歌人である三条西実隆からも指導を受けたらしい〔西宮市役所 1959〕。永正13年（1516）2月には、連歌師宗長を鷹尾城に招いたという逸話もある〔角田 1981〕。

## 2. 鷹尾城について

鷹尾城は、瓦林政頼によって城山（標高 262.1 m）に築かれた中世山城である。「芦屋城」とも呼ばれる。また、山城を「鷹尾山城」、平城を「芦屋城」と区別している場合もある〔角田 1981〕。この場合、城山南麓遺跡（芦屋市山芦屋町）が平城にあたると考えられる（第11図）。先述のとおり、鷹尾城が立地する城山は、六甲山地の東部の前山山地からのびる尾根の南端の頂で、その東側には芦屋川が流れおり、一方の西側を流れる高座川は城山の南で芦屋川と合流する（第1・11図）。

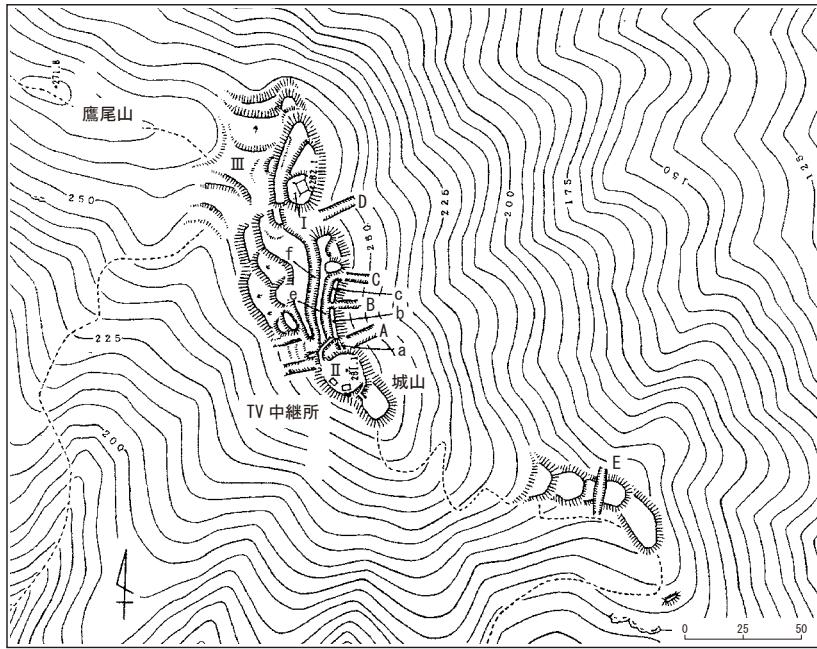
芦屋市教育委員会による鷹尾城の調査研究は、文献史学に基づくものが中心で〔有坂 1971a、芦屋市役所 1976〕、考古学に基づく現地調査は分布調査を実施している程度で〔第12集〕、縄張図の作成をはじめ、調査・研究がほとんどできていない。その一方で、山上雅弘氏〔山上 1982〕と角田誠氏〔角田 1981・2011〕ら研究者による調査・研究がいくつかあり、各氏によって作成された縄張り図が公表されている（第12・13図）。そこで、今回は、両氏の調査・研究に依拠して、鷹尾城の概要について述べる。

鷹尾城が永正8年（1511）に築城されてからの出来事は先述のとおりであるが、その廃城の時期について角田氏は〔角田 1981〕の中で『『細川両家記』記載の永禄八年（一五六五）の越水攻城軍の配置にはまつ



第12図 山上雅弘氏作成の鷹尾城縄張図 全体図：1／2500 各地区 1／1000（[山上 1982] を改変）

たく鷹尾城の存在が意識されておらず、このことから考えると、この時すでに鷹尾城は廃されていたものと思われる」と記している。しかし、同氏は、〔角田 2011〕では「越水城は城主を交替してゆくが、



第 13 図 角田誠氏作成の鷹尾城縛張図（〔角田 2011〕を一部改変）

にその遠方の大坂平野まで一望できる優れた眺望であり（第 14 図）、一方の後者は南方を中心にその東西の眺望が開け、神戸平野と大阪湾、天候が良ければさらにその遠方まで見ることができる（第 15 図）。

曲輪 II の背後には堀切と土橋 a が設けてあり、登山道は土壘 b・c 上を通って北へ向かうが（本書の「I・J 地区」）、そこには堅堀 A・B・C・D が東斜面に設けられている。土壘 b・c に並行して西側には平行する 2 条の横堀状遺構 e・f [角田 2011]（〔山上 1982〕では「堅堀状遺構 3 本」と記述されている）が直線的に走る（第 16 図）。これらは、鷹尾城に伴うものではなく、戦時中に旧陸軍がここに高射砲関連の施設を設けるために掘った塹壕の跡であるという説もあるが、鷹尾城に伴うものなのか、後世のものなのか等については不明である。これについて〔角田 1981〕には「山頂部には戦時中、高射砲（大倉山）の観測塔が建てられ、それに伴って塹壕が掘られ」と記されている。これらに基づき、角田氏はこの付近の本来の状態について「往時の城郭は、横堀状遺構 e・f の掘り残しの土壘の天端面で曲輪が形成されていて、その東側面に土壘 b・c が設けられていたものと考えられる」と推定している。曲輪 I から鷹尾山山頂に向かう尾根筋の鞍部は広く、そこに曲輪 III が設けられ（本書の「L 地区」）、その両側の谷筋にもそれぞれ数段の曲輪が設けられている（第 17 図）。さらに、曲輪 II から南東へ 120 m 下った尾根には、堀切 E（第 19 図。本書の「D・E 中間」と、その前後に数段の曲輪群が設けられている（本書の「B～E 地区」）（第 18 図）。

このような構造から、角田氏は「鷹尾城は背後からの攻撃を意識していないので、籠城戦には不向きであり、また、芦屋川方面に対する防御にも際立った先進性は見られないことなどから、戦国時代に越水城の支城としてのみ機能し得た城郭である」と考えている。

これから本書で報告する山本正男・徹男氏の城山遺跡で表面採集された遺物を検討すると、上記の角田氏の鷹尾城の性格の見解について再考を迫る点がいくつかあるが、それについては第 4 章に記す。

鷹尾城は越水城の支城として使用され、越水城が廃城となつた永禄十一年（一五六八）頃に鷹尾城も廃城されたものと思われる」と記している。

鷹尾城の構造について、〔角田 2011〕に基づいて概観すると、現在、送電鉄塔が建っている標高 262.1 m の城山最高所にある曲輪 I（本書の「K 地区」と、その南方のテレビの中継局が建っている標高 261.1 m にある曲輪 II（「城山頂上地区」）を中心としている（第 13 図）。前者は東方に眺望が開け、西摂平野やさら



第 14 図 城山遺跡 K 地区から南東方向の眺望



第 15 図 城山遺跡城山山頂から南西方向の眺望



第16図 鷹尾城跡横堀状遺構（第5図の中央の空堀。北から）



第17図 城山と鷹尾山の鞍部（第5図のL地区。南東から）



第18図 鷹尾城跡曲輪（第5図のE2。南から）



第19図 鷹尾城跡堀切（第5図のD・E中間。南から）

## 第3章 採集遺物

### 第1節 各地区における採集遺物の状況

#### 1. 概要

山本正男・徹男氏によって採集された2,000点以上の遺物は、第1章第2節で記したように、そのほとんどが野帳等に詳細な記録が残されているので、個々の採集位置について検討できる。

それらの表面採集された位置は、登山道の屈曲や平場、空堀等を目安に、両氏によって設定されたA～N・Q・R地区（第5図）や2つの地区の中間、あるいは各地区における斜面部分等の表現で示されている。具体的には、標高の低い方から標高の高い方へと、順に「A地区」「A・B中間」「B地区」「B・C中間」「C地区」「C・D中間」「D地区」「D・E中間」「E地区」「F地区」「F・G中間」「G地区」「H地区」「I地区」「J地区」「J・K中間」「K地区」「L地区」「M地区」「M・N中間」「N地区」「Q地区」「R地区」がある。また、「B地区」「E地区」を細分化した「B1」「B2」「B3」「B4」「E1」「E2」「E3」や、目印になる構築物である「鉄塔」（送電鉄塔）や「土橋」、地名に即した「リス谷」（城山の登山口からすぐの場所にある砂防堰堤のある谷）、「城山山頂」（現在、NHKとサンテレビの電波塔やベンチなどがある城山の山頂の平坦地）といった表記などもある。

山本正男・徹男氏が表面採集されてきた遺物は27ℓ容量のコンテナで約8箱分であるが、今回、整理した結果、その総数は2,118点を数えた。その内訳は、弥生土器98点、土師器818点、須恵器32点、陶器・磁器232点、瓦（瓦質土器を含む）40点、石製品（自然石を含む）236点、金属製品（鉄製品・銅製品・鉛製品）86点、焼土塊（壁土を含む）576点である（第1表）。それらは、主に弥生時代、室町時代のもので、わずかに古墳時代や江戸時代、近代のものを含む。

これらの採集遺物は、各地区において点数や種類に差や偏りが認められる。すでに、〔第12集〕において、弥生土器が城山山頂以北の各地区（第5図のI～N地区付近）に濃密に分布すること、須恵器がE地区を北限として点在すること、室町時代の土師器・陶器・磁器・古瓦などがL地区以南で広範囲に採集されることが指摘されていたが、今回の整理結果においても概ねこの傾向が認められる。もちろん、表面採集されたすべての遺物が原位置を保っているわけではなく、土砂流出や雨水による移動は想定できるが、遺物の分布は、本来の出土位置をある程度反映していると考える。

#### 2. 各種類の遺物の各地区における採集の傾向

ここでは、第1表に基づき、各種類の遺物の各地区における採集の傾向について記す。

第1表に示したとおり、山本正男・徹男氏が城山遺跡（鷹尾城跡）で表面採集した遺物の総点数は、2,118点である。これについて年代が検討できる遺物の種類の内訳をみると、弥生土器が98点であるのに対して、室町時代後期のものが大半を占める陶器・磁器が232点、瓦が40点、焼土塊が576点となっている。このことから、採集遺物は、室町時代後期のものが主体で、次に弥生時代のものであることがわかる。

なお、ここで土師器と須恵器の点数を挙げなかったのは、土師器については厳密に判別できない弥生土器の破片が多く含まれているためであり、一方の須恵器についても古墳時代後期のものと中世のものが含まれるが厳密に区別することができないためである。また、石製品の中には自然石が多く含まれて

位置情報	弥生土器	土師器	須恵器	陶器・磁器	瓦	石製品	金属製品	焼土塊	合計
A地区付近	1	2	2	13	3	1	8	1	31
A・B中間付近	1	11	2	13	3	6	19	2	57
B地区付近	6	425	13	88	6	95	12	98	743
B・C中間	0	2	0	1	1	1	0	3	8
C地区付近	0	8	4	15	14	4	3	3	51
C・D中間	0	0	0	0	0	0	0	5	5
D地区付近	2	12	1	34	3	7	3	27	89
D・E中間	0	1	0	1	0	0	0	0	2
E地区付近	1	77	3	35	3	9	18	65	211
F地区付近	2	19	1	2	1	11	0	143	179
F・G中間	0	1	0	0	0	0	0	0	1
G地区付近	0	6	0	2	0	4	2	7	21
H地区付近	10	50	2	13	5	22	0	146	248
H地区かG地区	0	4	0	0	0	0	0	0	4
I地区付近	0	11	1	1	0	1	0	0	14
J地区付近	2	15	1	0	0	6	0	1	25
J・K中間	0	8	0	0	0	0	0	1	9
K地区付近	15	63	0	0	0	3	0	20	101
L地区付近	1	21	0	0	0	0	0	0	22
L・M中間	0	0	0	0	0	0	1	0	1
M地区付近	2	9	0	0	0	1	0	2	14
M・N中間	1	0	0	0	0	1	0	0	2
N地区付近	44	57	0	2	0	3	0	5	111
Q地区付近	0	0	0	1	0	1	0	2	4
R地区付近	0	0	0	1	0	0	19	0	20
城山山頂付近	2	9	0	1	0	29	0	35	76
鉄塔付近	8	5	2	0	0	27	0	7	49
登山口からA地区まで	0	0	0	3	1	2	1	2	9
不明	0	2	0	6	0	2	0	1	11
合計	98	818	32	232	40	236	86	576	2,118

第1表 遺物の採集位置と種類

おり、金属製品の中には近現代のものも含まれていることから、ここでは検討の対象としない。

次に、それぞれの種類の遺物の各地区における採集点数をみると、弥生土器はN地区付近の44点が最も多く、K地区付近の15点、H地区付近の10点が続く。この状況から、弥生時代の遺構は、鷹尾山の山頂付近であるN地区付近を中心にして、城山山頂付近であるH地区付近まで分布していると推定する。なお、区別はできなかったものの、K～N地区付近の土師器の多くが、実際は弥生土器の破片と考えられ、先述した弥生土器の採集位置が城山山頂から鷹尾山山頂に偏在している傾向を補強する。

一方、室町時代後期と判断できる遺物（陶器・磁器）についてみると、A地区付近から城山山頂付近を中心に採集されている傾向を読み取ることができる。つまり、城山山頂とそこから南東方向にのびる尾根上を中心に室町時代後期の遺構が分布すると考えられる。また、瓦と壁土を含む焼土塊についても、同様の分布範囲内に収まることから、同時期の遺物である蓋然性が高い。なお、城山山頂より北方については、室町時代後期の遺物の分布は稀薄であるが、L地区とN地区でわずかながら土師器羽釜（第42・44・45図69・70）が採集されており、鷹尾城の縄張りから外れていたと断言することはできない。

室町時代後期の遺物の採集点数は、B地区周辺が最も多い。この中で、当地区で土師器とするものは、山本徹男氏が「B地区北側の山道やその北側法面において、土師器皿片を集中的に採集できた」と話しているとおり、中世の土師器皿の破片が多く含まれている。それに対して、弥生土器の破片はほとんど含まれていないと考える。さらに、陶器・磁器も当地区において最も多く採集されている。その中には、次節で詳述するとおり、中国産褐釉陶器の破片が集中して採集されており、青磁碗・皿等の輸入陶磁器類が含まれている。また、瓦片は2番目に多く、二次焼成を受けた建物の壁土を含む焼土塊は3番目である。

B地区付近の次に室町時代後期の遺物が多く採集されているのは、H地区付近である。特に、焼土塊は146点を数え、各地区において最も多い。

3番目に遺物の採集点数が多いのはE地区付近で、211点を数える。当地区では陶器・磁器（35点）及び土師器（77点）が、ともにB地区に次いで2番目に多い。土師器の内容については、やはり土師器皿の破片が主体である。また、当地区からは、焼土塊が65点と比較的多く採集されており、瓦片も3点採集されている。

なお、C地区付近は、採集遺物の合計点数は51点とそれほど多いとは言えないにもかかわらず、瓦片をみると14点と最多である。

採集遺物の中には、わずかながらではあるが、明らかに古墳時代後期の須恵器が含まれている。城山・三条古墳群の構成墳に伴う遺物であろう。また、陶器・磁器の中には、江戸時代初期の唐津焼碗と後期の染付磁器そば猪口の破片がそれぞれ1点ずつ認められる。これらの内、前者は時期的にみて、城山・鷹尾山も分布範囲になっている1620年代の徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群の採石活動に伴うものの可能性がある。

以上、山本正男・徹男氏による城山及び鷹尾山で表面採集遺物について検討した結果、弥生時代と室町時代後期を主体としており、その採集位置から高地性集落と、鷹尾城跡のそれぞれの中核を把握することができた。これは、これまでに本格的な発掘調査が実施されていない城山遺跡（鷹尾城跡）の実態を知る上で大変重要な成果である。

## 第2節 採集遺物

### 1. 概要

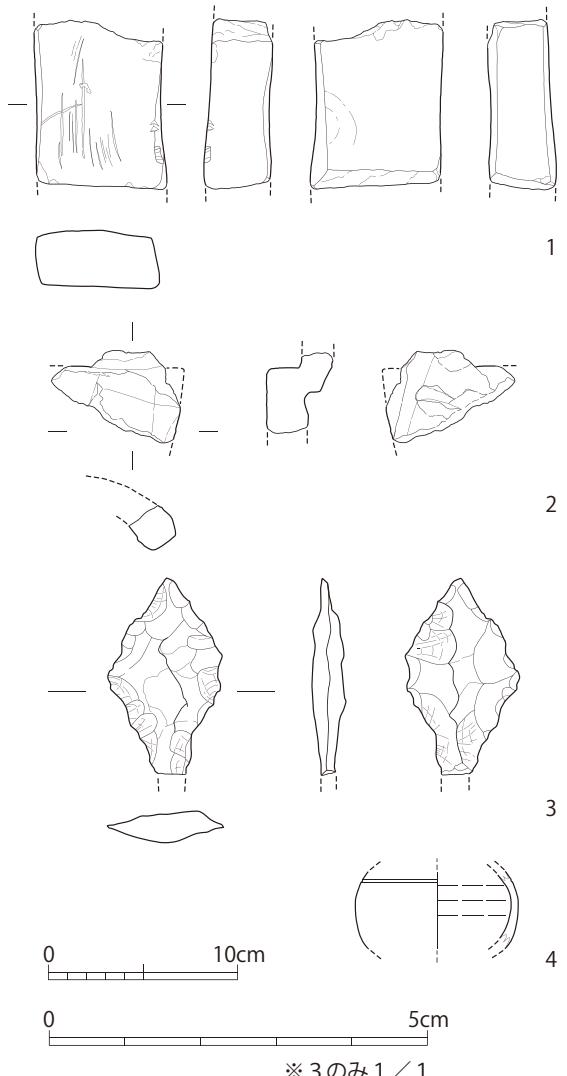
先述したとおり、山本正男・徹男氏によって採集された遺物は合計 2,118 点を数える。その内訳は、弥生土器、土師器（皿・羽釜）、須恵器、瓦質土器（風炉・火鉢）、陶器（壺・皿・壺・甕・擂鉢）、磁器（壺・碗・皿）、瓦（丸瓦・平瓦など）、石器、石製品（砥石・硯石・石臼）、鐵製品（鐵釘・鐵鏃など）、銅製品、鉛製品（鉛玉）、鉱滓や、壁土、焼土塊など、多種多様である。このうち、残存率が比較的高く、種類や器形、時期が特定できるものを抽出し、73 点は実測図と写真（第 20 ~ 47 図 1 ~ 73）と観察表（第 2 ~ 5 表）を、116 点は写真（第 48 ~ 66 図 74 ~ 189）を掲載し、前者は地区ごとに、後者は種類ごとに説明する。

### 2. 図化した遺物

第 20・26・32・35・39・42・46 図は各遺物の実測図、第 21 ~ 25・27 ~ 31・33・34・36 ~ 38・40・41・43 ~ 45・47 図は各遺物の写真である。各遺物の採集地区は、第 20 ~ 25 図が A 地区、A・B 中間、西南麓、第 26 ~ 31 図が B 地区と B・C 中間、第 32・34 図が C 地区、第 35 ~ 38 図が D 地区と D・E 中間、第 39 ~ 41 図が E・F・G 地区、第 42 ~ 45 図が H・L・N 地区、第 46・47 図が M・N 中間と N 地区の遺物である。

#### (1) A 地区、A・B 中間、西南麓（第 20 ~ 25 図）

1 は A 地区採集の砥石で、残存長 9.0cm、幅 7.0 cm、厚さ 3.5 cm、重さ 370 g を測る。砂岩とみられるやや粗い石質で、A 面に線状痕、B 面に使用による窪みがある。2・3 は、A・B 中間の採集遺物である。2 は丸瓦の玉縁部分で、凸面にはヘラナデがみられる。3 は基部が欠損している突基式の打製石鏃で、鏃身は菱形を呈する。残存長 2.6cm、幅 1.5cm、厚さ 0.4cm、重さ 1.45 g である。4 は A 地区以南の採集遺物で、「西南麓」と記録されている。胎土・焼成状況・色調から、華南三彩の壺と考える。



第 20 図 A 地区、A・B 中間、西南麓採集  
遺物実測図 1 / 4・1 / 1



第 21 図 A・B 中間採集石鏃（原寸大）



第 22 図 A 地区採集砥石

(2) B 地区と B・C 中間（第 26～31 図）

5～26 が B 地区（B 地区を細分して、標高の低い方から順に付した B 1・B 2・B 3・B 4 といった地区表記のものを含む）、27 が B・C 中間の採集遺物である。B 地区は特に土師器皿が集中的に採集された地区で、それを反映するように図化できた土師器皿 5～16 は、合計 12 点と多い。5～11 が復元口径 10cm 以下の小皿、12～14・16 が復元口径 12cm 程度の中皿で、浅黄橙色や浅黄色、にぶい黄橙色といった淡褐色系〔伊野 1995〕のものが主流である。底部まで完存するものはないが、他の破片をみてもへそ皿といえるものは見当たらず、平底の手づくね成形で、直線的に立ち上がる体部をもつ「皿 K」〔中井 2022〕といえる。外面体部は指オサエが顕著で、口縁部から内面にかけてはナデ調整がみられる傾向がある。また、11・13・14 は、内面底部周辺に凹線状圈線がみられる。これらの特徴は、鷹尾城の年代と重なる小森編年〔小森 2005〕の京 X I [京都 X] 期古（16 世紀前葉）の土師器皿に相当する。なお、5 と 7 は煤化が



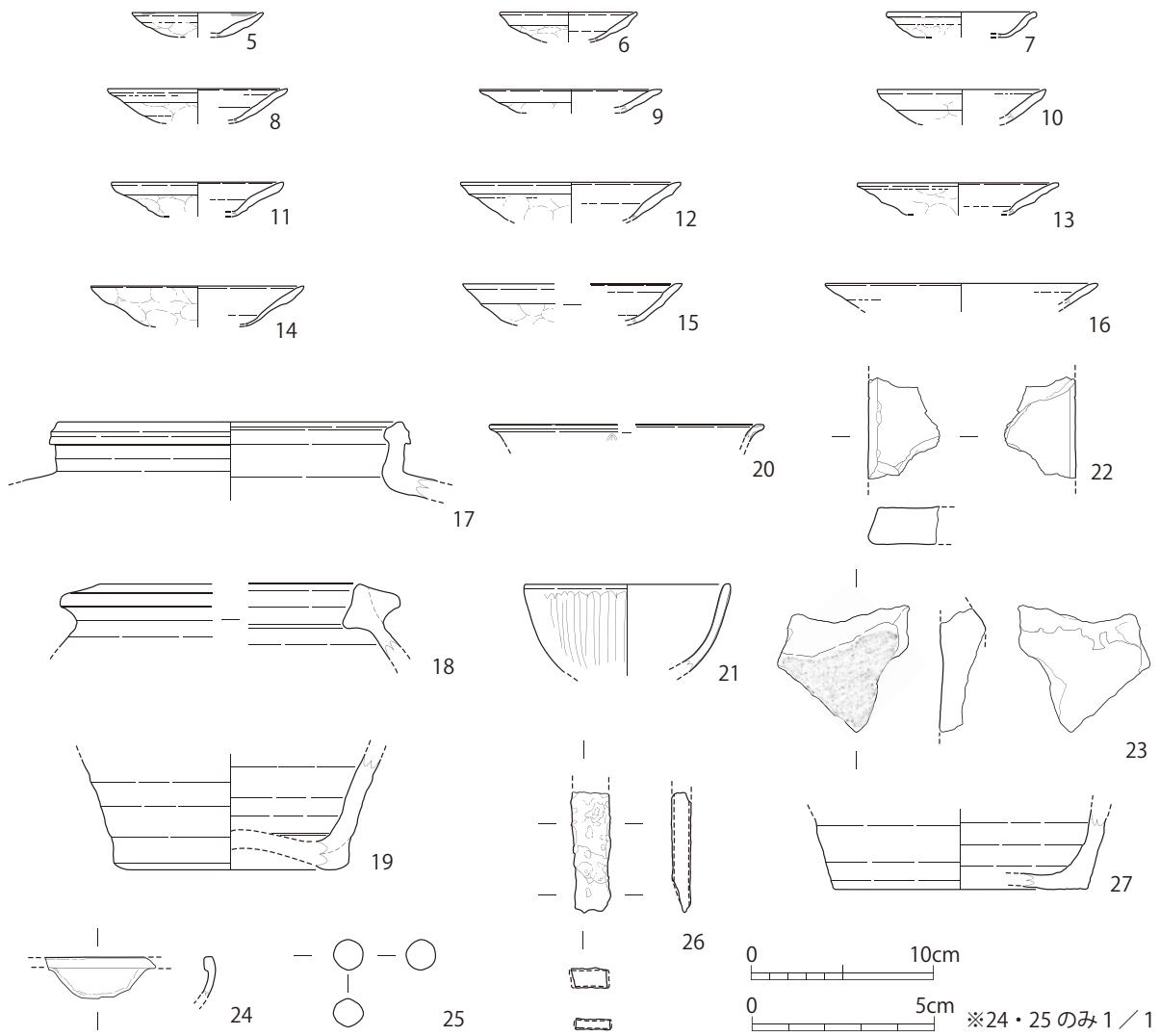
第 23 図 A 地区採集砥石



第 24 図 A・B 中間、西南麓採集遺物（外面）



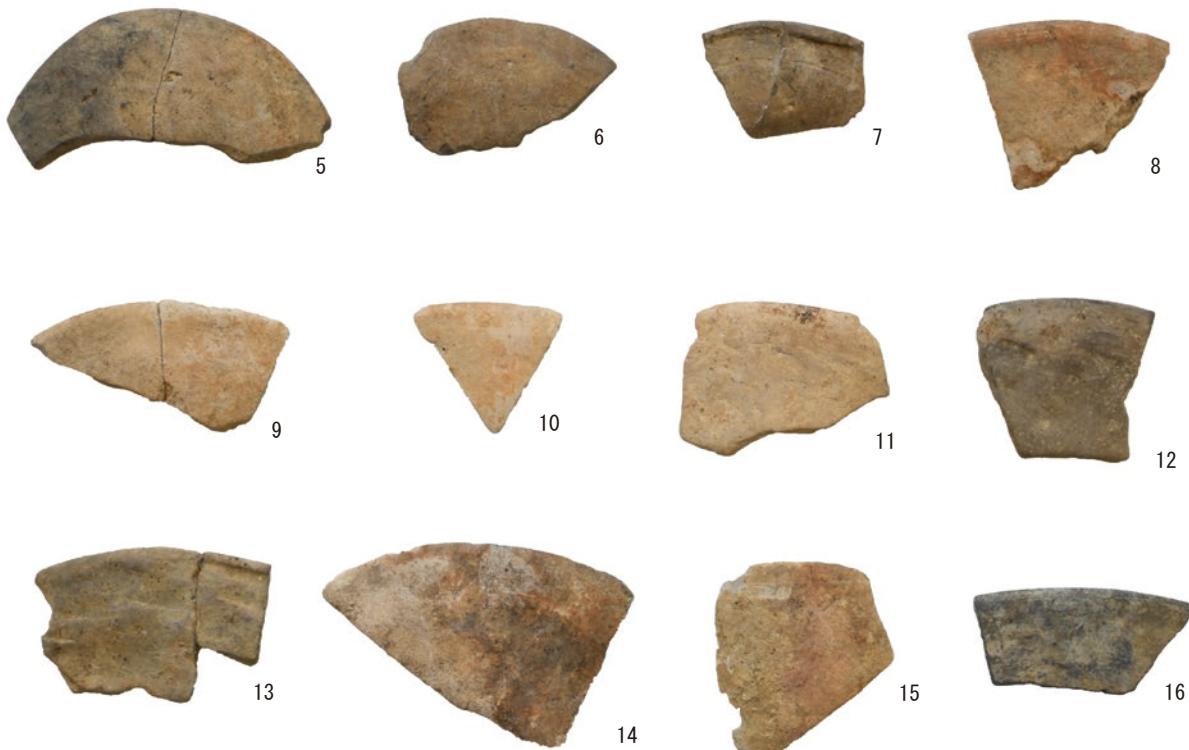
第 25 図 A・B 中間、西南麓採集遺物（内面）



第 26 図 B 地区、B・C 中間採集遺物実測図 1/4・1/1

認められることから、灯明皿として使用されたことがわかる。

17 は短く直立する頸部をもつ陶器の壺で、口縁部は瘤状に内外に拡張して外面に外傾面をもつ。胎土や色調から常滑焼や丹波焼といった焼締陶器と考える。18・19 は中国産褐釉陶器壺である。18 は、口縁部で、短めの頸部が口縁部方向に窄まりながら立ち上がり、断面方形の口縁部の内端に突起を有する。外面は鍔状に粘土を貼り足していることから、沖縄壺 5 類〔瀬戸ほか 2007〕に比定する。19 は底部で、内面にロクロ目が残り、上げ底傾向や肩部に向かって大きく開く様子がみられる。沖縄壺 5 類の年代は、沖縄では沖縄 V 期（14 世紀末～15 世紀中葉）とされている〔瀬戸ほか 2010〕。一方、堺環濠都市では、完形品を含めて一定量が出土しており、15 世紀第 3 四半期から 16 世紀中頃にかけて、堺が琉球貿易や遣明船貿易を行っていた頃の資料と考えられている〔續 2010〕。20・21 は青磁で、20 は小片ながら、短く外反する口縁部や体部の鎧蓮弁文が観察できることから、大宰府分類の壺 III 類または IV 類〔太宰府市教委 2000、山本 2022〕とわかる。一方、21 は線描きで蓮弁文を表現する細蓮弁文碗（上田分類 B—IV、小野分類蓮弁文碗 C 群）〔上田 1982、小野 1982〕で、15 世紀後葉～16 世紀中頃に多い



第27図 B地区採集土師器（外面）



第28図 B地区採集土師器（内面）



第 29 図 B 地区、B・C 中間採集遺物（外面）



第 30 図 B 地区、B・C 中間採集遺物（内面）

ものである。青磁を細分した沖縄分類では、VI—1類（15世紀末～16世紀前半）の古相〔瀬戸2013・2015、瀬戸ほか2007〕に相当する。22・23はいぶし瓦片で、ともに平瓦と考えられる。22の凹面にはかすかにコビキ痕が、23の凹面には布目痕が残る。

24～26は金属製品である。24は、残存幅3.0cm、厚さ0.3cmの棒状部分に、厚さ0.2cmの板状部分が付く銅製品だが、棒状部分の左右や板状部分は欠損が進んでいるため、本来の形態や用途は不明である。25は鉛玉で、直径0.8cm、重さ3.3gの球形である。鷹尾城に伴うものではないと考える。26は、残存長6.6cm、幅2.2cm、厚さ1.1cm、重さ40.1gの短冊状鉄製品で、〔第12集〕では「板状鉄斧残欠」とした遺物である。現在は、鏽が進行していて表面に膨らみがみられるほか、厚さ0.9cmほどの中心部分とA面・B面の表面が剥離して、3枚に分離している。また、両側面も、A面・B面と同様に表面が剥離した様子が観察できる。したがって、本来の幅は現状より少し広いようである。両端は欠損しており、図では下端とした部分は片刃状を呈しているが、もともと刃部であったかどうかわからない。なお、中心部分はメタル度が高いことから、弥生時代の板状鉄斧とみるのは難しいが、用途は不明である。

B・C中間で採集された27は、備前焼壺の底部である。胎土はきめ細かい田土で、断面は灰赤色（いわゆるセピア色）を呈しており、乗岡編年中世5期（15世紀第3四半期～15世紀末）から中世6期（16世紀初頭～16世紀第3四半期）〔乗岡2000〕に特有のものといえる。

### （3）C地区（第32～34図）

28は備前焼擂鉢で、擂目は放射状である。明確な薄板状の口縁帯をもち、端部は丸みを帯びることから、乗岡編年中世5b期（15世紀第4四半期頃）〔乗岡2000〕に比定する。29～33は瓦である。凹面に布目がみえる29と凸面に工具痕ないしタタキ目の残る30・31は、いぶし瓦の可能性がある平瓦片である。凹面を丁寧なヨコナデで仕上げる32は、端部を面取りしていることから、平瓦の狭端部と推測したが、磨滅の顕著な凸面にかすかにコビキAに似た条痕がみられることや、端面の面取りや内面の調整の丁寧さから、香炉や火鉢の可能性も考えられる。33は、剥離や磨滅が顕著であるが、断面が弧を描かず板状を呈することから道具瓦や壇と考える。

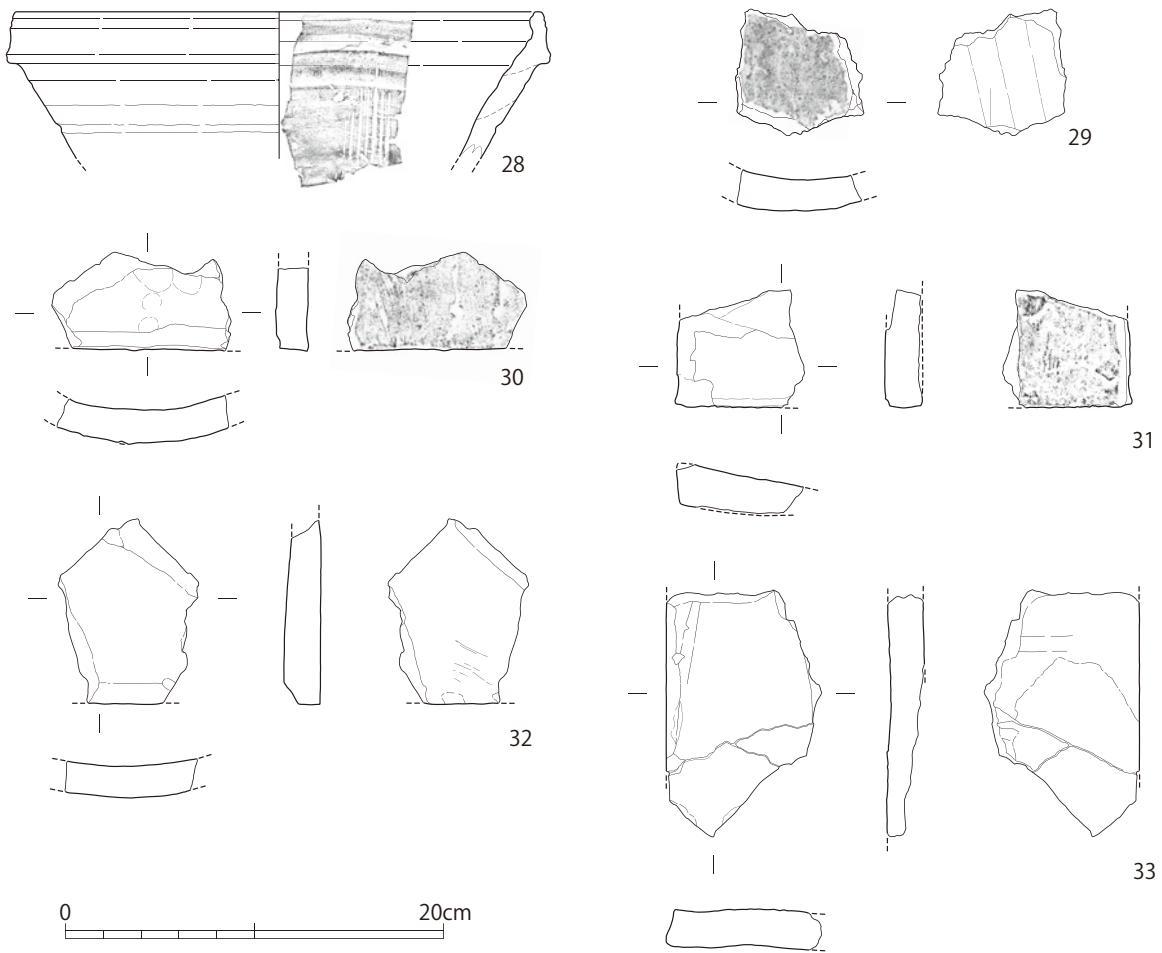
### （4）D地区とD・E中間（第35～38図）

34～39はD地区、40はD・E中間の採集遺物である。D地区では、備前焼片が多く採集されている。34は備前焼壺の肩部で、3条1単位の櫛描直線文が巡る。35は備前焼擂鉢の底部で、内面に放射状の擂目がみえる。36・37はともに平瓦で、37の凸面にはタタキ目が残る。

38・40は硯石で、いずれも粘板岩製と考えられる。38は使用による磨滅が顕著である。40は、長さ8.2cm、残存幅4.0cmと小型の携行品で、長方形の硯面には、小判形に海や陸が彫り込まれている。背面



第31図 B地区採集金属製品



第32図 C地区採集遺物実測図 1/4

は、欠損後に砥石として再利用された際の擦痕が認められる。39は楔形の鉄製品で、鋸が顕著だがタル度は高く、先端部が尖っていることから工具と推測する。

##### (5) E・F・G地区(第39～41図)

41～52はE地区、53はF地区、54はG地区的採集遺物である。なお、E地区の採集遺物では、42・47に「E1」、41・44・49・52に「E2」と小地区の記録がある。

41は、緩やかに外反しながら立ち上がる口頸部をもつ壺である。古墳時代の須恵器としているが、中世陶器の可能性もある。42は土師器皿で、復元口径8.4cmの小皿である。43は播磨型の土師器羽釜で、体部外面に平行タタキがみられ、鍔部の退化が進んでいることから長谷川編年のVI期(15世紀後半～16世紀初頭)[長谷川2007]に比定できる。44は、貫入のみられる灰釉の端反皿で、瀬戸・美濃大窯第1段階前半(1480年代から1530年代後半)[藤澤2001]と考える。45は唐津焼の丸塊である。このような塊は、大坂城・城下町において豊臣後期(1598～1615年)新段階以降に見られることから[大庭・清水2010]、徳川大坂城東六甲採石場に伴う遺物と考える。46は丹波焼擂鉢で、擂目が1本描きであることから17世紀前半より古いと考える[長谷川2022]。47は備前焼大甕の口縁部である。口縁部を外側に大きく折り曲げて断面形が細い橢円形に仕上げる玉縁は、重根分類IVB(15世紀前半～16世



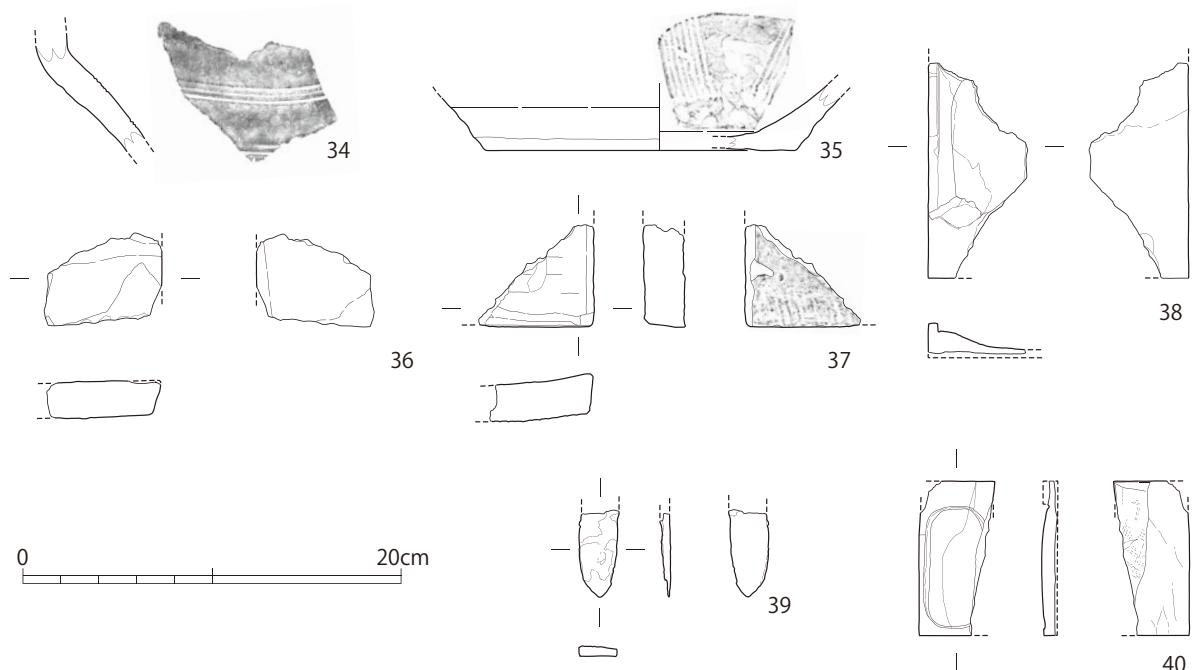
第33図 C地区採集遺物（外面、凹面）



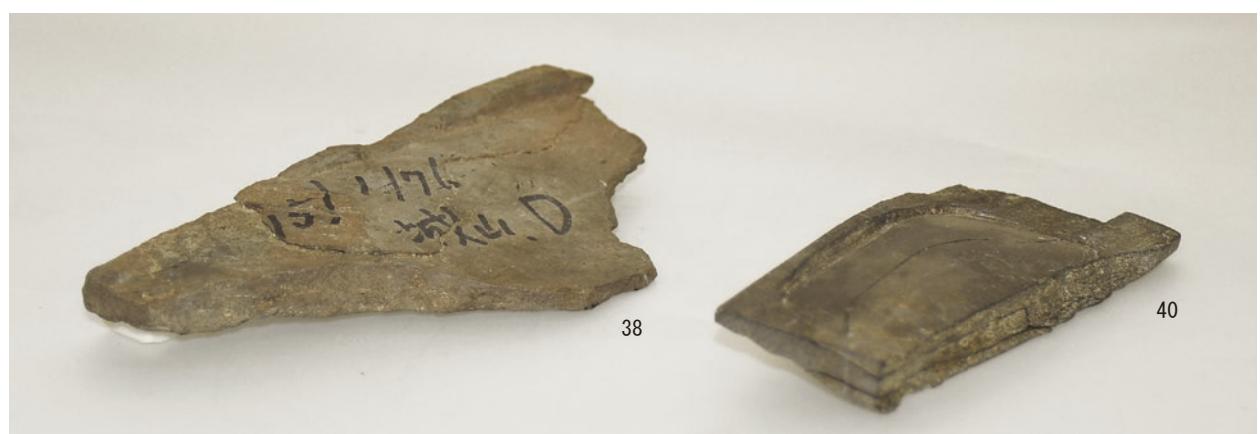
第34図 C地区採集遺物（内面、凸面）

紀初頭) [重根 2022] の特徴を示している。48 は 20 と同様に、鎧蓮弁文がある大宰府分類の坏III類ないしIV類 [太宰府市教委 2000、山本 2022] である。染付磁器碗の 49 は、口縁部内面に 2 条の圈線が巡り、薄手で直立する形態から、江戸時代後期のそば猪口と考えられる。50 は瓦質土器片で、平面円形の鉢の底部である。底部下端に突線を 1 条巡らせ、外面縁辺部に脚を貼り付けたもので、菅原分類深鉢(火鉢) M・N 形 [菅原 1989] に比定する。残存した脚部形態がわからないので、全周する形で図化しているが、本来は逆台形の脚部が数個付くようである。51・52 は厚手の瓦で、丸瓦の 51 は須恵質焼成で、玉縁が一部残っており、凹面にコビキ B がみられる。一方、平瓦 52 はいぶし瓦である。

53 は備前焼の壺で、口縁部の玉縁は小さい。54 は、極端に頸部の短い焼締陶器の無頸壺で、外面には灰オリーブ色の自然釉がかかる。備前焼または丹波焼であろう。



第 35 図 D 地区、D・E 中間採集遺物実測図 1/4



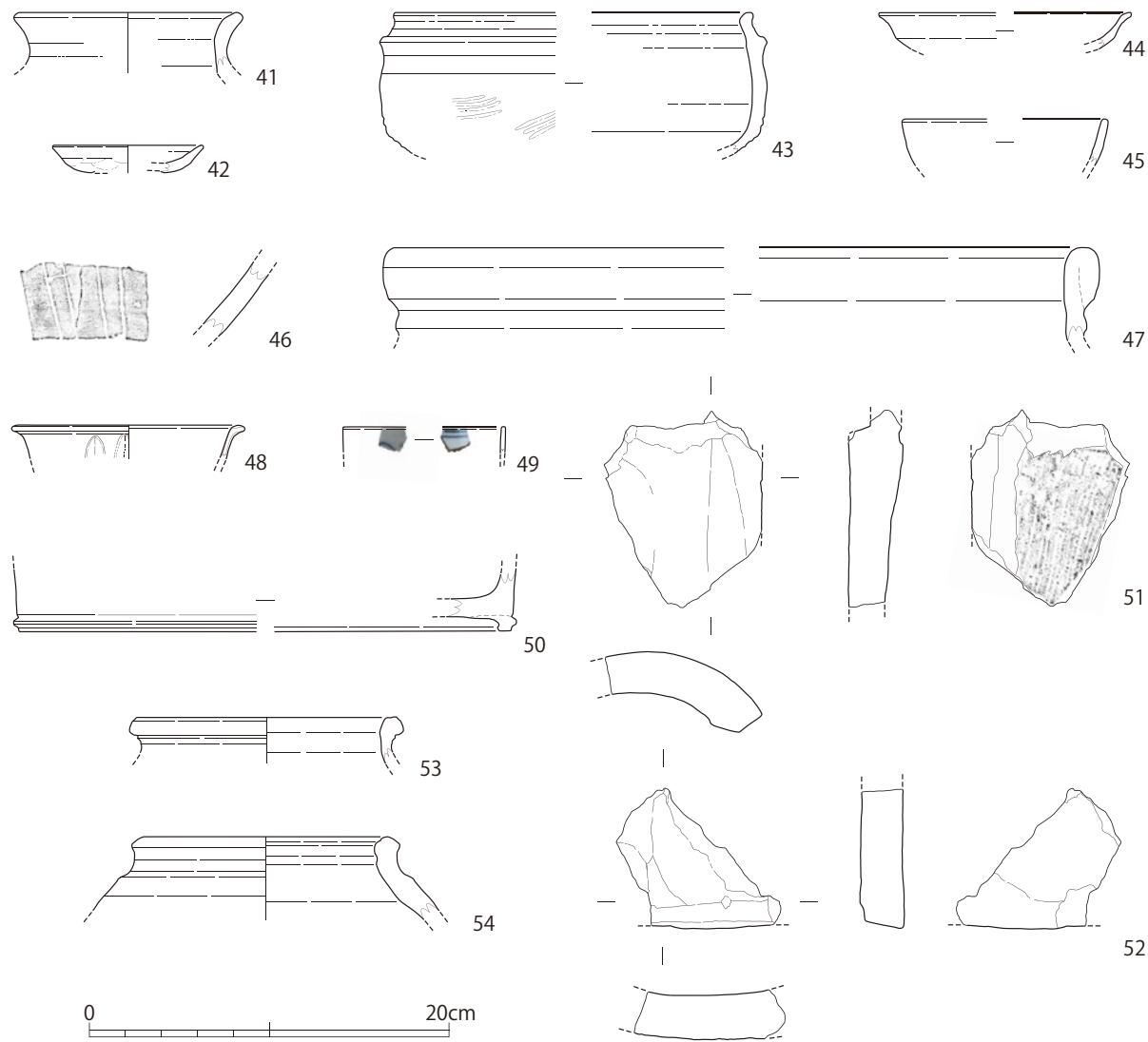
第 36 図 D 地区、D・E 中間採集硯石



第37図 D地区採集遺物（外面、凹面）



第38図 D地区採集遺物（内面、凸面）



第39図 E地区、F地区、G地区採集遺物実測図 1/4

(6) H・L・N地区 (第42～45図)

55～68はH地区、69はL地区、70はN地区的遺物である。55は播磨型の土師器羽釜で、短い口縁の端部に内傾面をもち、退化した鍔部をもつ。43と同様、長谷川編年のVI期（15世紀後半～16世紀初頭）〔長谷川2007〕に比定できる。56は土師器皿（小皿）で、外面の指オサエやナデ調整が観察できる。

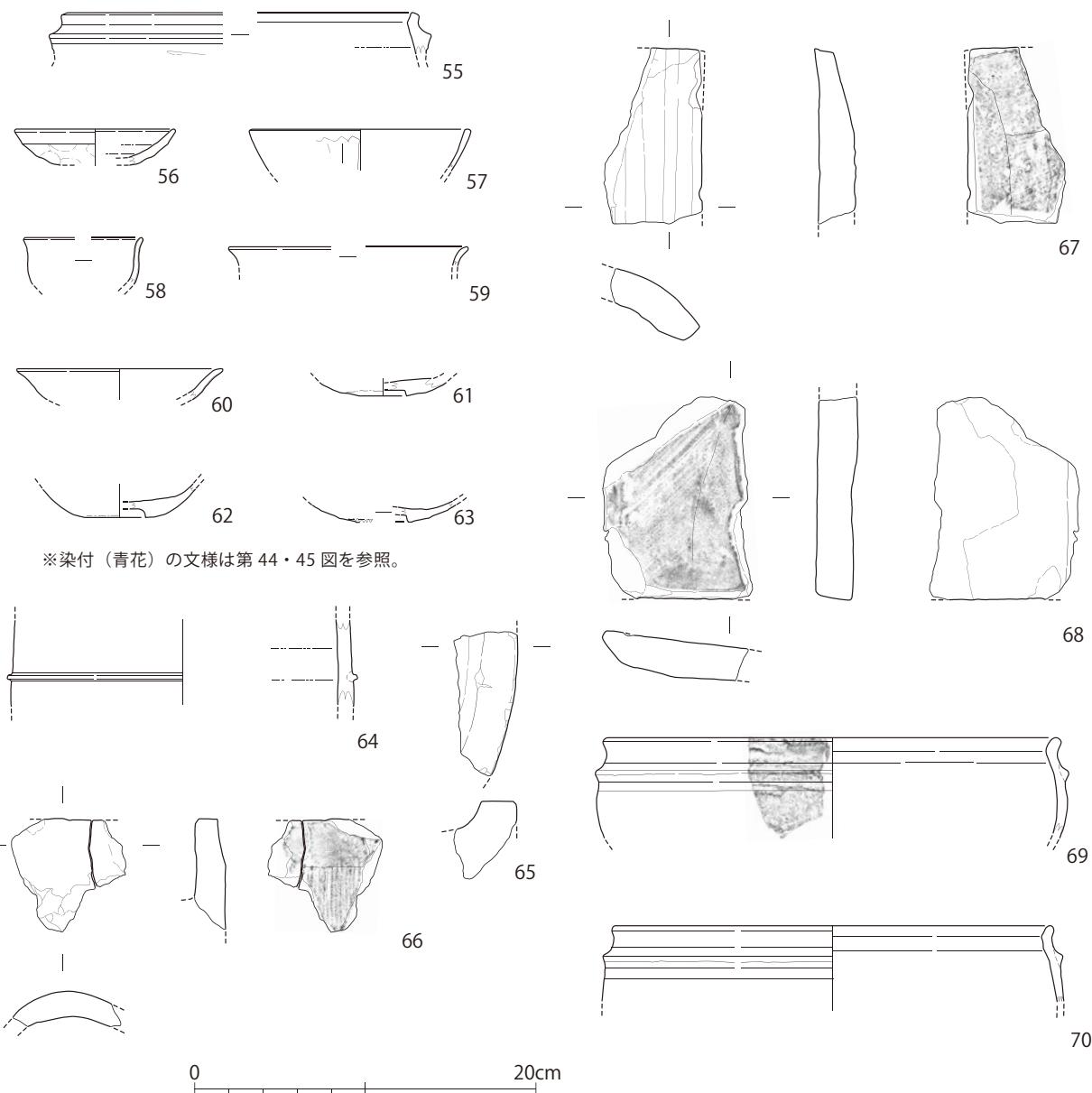
H地区は陶器・磁器が13点採集されており、中でも貿易陶磁が多いが、このうち57～63の7点を図示できた。57は細蓮弁文の青磁碗で、沖縄分類のVI-1類（15世紀末～16世紀前半）〔瀬戸2013・2015、瀬戸ほか2007〕といえる。58～63は染付（青花）で、58が端反盃、59が端反碗、60が端反皿、61～63が碁笥底の底部片である。小片のため、模様が把握できるものは限られるが、60は外面に花唐草文、61～63は見込みにねじ花文、62・63は外面に鋸歯文状の芭蕉文がみられる。60は皿B1群、61～63は皿C群〔小野1982〕で、沖縄6期（15世紀末～16世紀前半）の年代観が与えられる〔瀬戸2017〕。64は瓦質土器鉢（火鉢）と推測しており、直立する体部に1条の突線がみられる。65は直径28.4cmに復元できる茶臼の破片である。66・67は丸瓦の玉縁部で、66は凹面にコビキ痕が、67は凸面



第40図 E地区、F地区、G地区採集遺物（外面）



第41図 E地区、F地区、G地区採集遺物（内面）



第 42 図 H 地区、L 地区、N 地区採集遺物実測図 1/4

にヘラナデ、凹面に布目痕がみられる。68 は平瓦片で、凹面にコビキ A と布目痕が残る。

69 は体部外面に煤が付着した土師器羽釜である。55 より口縁端部はやや丸みを帯びるが、同時期のものでよいだろう。70 も、同様の土師器羽釜である。

#### (7) M・N 中間と N 地区 (第 46・47 図)

71～73 は弥生土器である。71 は、口縁端がラッパ形に開く広口壺ないし器台の口縁端



第 43 図 H 地区採集石臼 (茶臼)

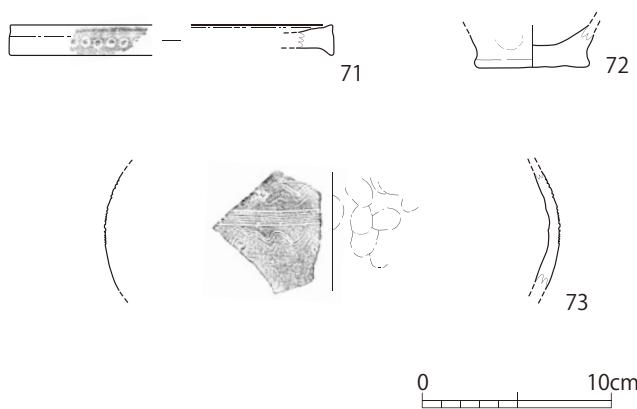


第44図 H地区、L地区、N地区採集遺物（外面）



第45図 H地区、L地区、N地区採集遺物（内面）

部で、直立する端面に竹管文を有する。72は、平底の壺の底部である。73は壺の体部で、外面には、6条1単位の原体を用いて、櫛描直線文と櫛描波状文を交互に文様を施す。これらは、弥生時代中期後半から後期前半のものと考えられる〔森岡 2021〕。



第46図 M・N中間とN地区採集弥生土器実測図 1/4



第47図 M・N中間とN地区採集弥生土器

報告書番号	種類	法量 (cm・g)	出土地区	色調	胎土	焼成	文様・製作技術・焼成技術など	備考
1	砥石	長さ:(9.0) 幅:7.0 厚さ:3.5 重量:370	A地区	A面-灰(5Y5/1)～灰オリーブ(5Y5/2) B面-灰黄(2.5Y6/2) 断面-灰黄(2.5Y7/2)～浅黄(2.5Y7/3)	—	—	—	砂岩と推定 A面に線状痕、B面に使用による窪みあり
2	瓦(丸瓦)	長さ:(4.9) 幅:(6.8) 厚さ:(3.2)	A・B 中間	凸面-灰白(5Y7/1) 凹面-灰(5Y5/1) 断面-灰白(5Y8/2)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	凸面-ナデ・ヘラナデ 凹面-調整不明	玉縁部分
3	石鎌	長さ:(2.6) 幅:1.5 厚さ:0.4 重量:1.45	A・B 中間	A面-黒色(10Y2/1)	—	—	—	突基式の打製石鎌 鎌身は菱形 サヌカイト製
4	華南三彩か? 壺	腹径:(8.6) 高さ:(4.1)	西南麓	外面-ウコン(黄)・濃い抹茶 内面-にぶい褐(7.5YR6/3) 断面-にぶい褐(7.5YR6/3)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-凹線あり	腹部(約1/12残存)
5	土師器皿(灯明皿)	口径:(7.2) 高さ:(1.4)	B2	外面-灰黄(2.5Y7/2)～浅黄(2.5Y7/3) 内面-浅黄(2.5Y7/3～7/4)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-弱い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/3残存) 口縁部はいびつ 煤化痕が残る
6	土師器皿(小皿)	口径:(7.6) 高さ:(1.6)	B1	外面-にぶい黄橙(10YR6/3～6/4) 内面-にぶい黄橙(10YR6/3～6/4)	ø1mm以下の黒色粒をやや多く含む	良好	外面-弱い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/5残存)
7	土師器皿(灯明皿か?)	口径:(8.2) 高さ:(1.4)	B1	外面-灰黄(2.5Y7/2～6/2) 内面-浅黄(2.5Y7/3)～にぶい黄(2.5Y6/3)	ø1mm以下の長石・黒色粒を少量含む	良好	外面-強い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/7残存) 明確な灯芯痕は見られないが、全体的に灰色にくすんでいる
8	土師器皿(小皿)	口径:(9.9) 高さ:(1.9)	B2	外面-浅黄橙(10YR8/4) 内面-浅黄橙(10YR8/3)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-やや強い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/7残存)
9	土師器皿(小皿)	口径:(10.0) 高さ:(1.3)	B4	外面-淡黄(2.5Y8/4)～浅黄(2.5Y7/4) 内面-浅黄橙(10YR8/4)～にぶい黄橙(10YR7/4)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-弱い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/5残存)
10	土師器皿(小皿)	口径:(9.2) 高さ:(1.9)	B4	外面-浅黄橙(10YR8/3～8/4) 内面-にぶい黄橙(10YR7/4)～明黄褐(10YR7/6)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-弱い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/9残存)
11	土師器皿(小皿)	口径:(9.4) 高さ:(1.9)	B4	外面-淡黄(2.5Y8/4)～浅黄(2.5Y7/4) 内面-にぶい黄橙(10YR7/3～7/4)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-弱い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ・底部周辺に凹線状囲線がみられる	口縁部(約1/9残存) 小森編年京X I [京都X]期古(16世紀前葉)[小森2005]に比定
12	土師器皿(中皿)	口径:(12.0) 高さ:(2.1)	B4	外面-黄灰(2.5Y6/1)～灰黄(2.5Y6/2) 内面-灰黄(2.5Y6/2)～にぶい黄(2.5Y6/3)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-弱い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/10残存)
13	土師器皿(中皿)	口径:(11.0) 高さ:(1.8)	B4	外面-灰黄(2.5Y6/2)～にぶい黄(2.5Y6/3) 内面-灰黄(2.5Y6/2)が多くを占めるが、一部淡黄(2.5Y8/4)がみられる	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-強い指オサエ 内面-ナデ・底部周辺に凹線状囲線がみられる	口縁部(約1/10残存) 小森編年京X I [京都X]期古(16世紀前葉)[小森2005]に比定
14	土師器皿(中皿)	口径:(11.7) 高さ:(2.3)	B1	外面-灰黄(2.5Y7/2)～浅黄(2.5Y7/3) 内面-にぶい黄橙(10YR7/4～6/4)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-強い指オサエ 内面-ナデ・底部周辺に凹線状囲線がみられる	口縁部(約1/5残存) 小森編年京X I [京都X]期古(16世紀前葉)[小森2005]に比定
15	土師器皿(中皿)	口径:不明 高さ:(2.3)	B4	外面-にぶい黄橙(10YR7/4)一部、明褐灰(5YR7/2)～灰褐(5YR6/2)の部分あり 内面-にぶい黄橙(10YR7/4)	やや粗 ø1mm以下の長石・黒色粒をやや多く含む	やや不良	外面-強めの一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	他の個体から直径を推定
16	土師器皿(中皿)	口径:(15.0) 高さ:(1.4)	B1	外面-灰(N4/0) 内面-暗灰(N3/0)	—	良好	外面-ナデ 内面-ナデ	口縁部(約1/10残存)
17	焼締陶器壺	口径:(18.8) 高さ:(3.3)	B4	外面-暗赤褐(5YR3/2～3/3) 内面-黒褐(10YR3/1)～黒(10YR2/1)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	外面-ナデ 内面-ナデ	口縁部(約1/30残存) 常滑焼または丹波焼
18	中国産褐釉陶器壺	口径:不明 高さ:(3.2)	B地区	外面-灰白(2.5Y7/1) 内面-灰白(2.5Y7/1) 断面-灰黄(2.5Y6/2) 褐釉-褐(10YR4/4)	ø1mm以下の長石を含む	良好	—	残存率不明 口縁部を強固にするため、粘土紐を何回も折り込んで、口縁部を作っていることが断面から観察できる(図化したのは、分かりやすい貼り付け部分のみ) 釉の剥離が顕著 沖縄壺5類[瀬戸ほか2007]に比定
19	中国産褐釉陶器壺	底径:11.2 高さ:(6.4)	B4	外面(褐釉)-オリーブ褐(2.5Y4/4) 外面(露胎)-灰(7.5Y6/1) 内面(褐釉)-オリーブ褐(2.5Y4/6) 断面-灰白(10Y7/1)	ø1mm以下の黒色粒を含む	良好	内面-底面にロクロ目が残る	底部(約1/10残存) 内外面ともに施釉 内面より外面の釉が黒褐色がかる 沖縄壺5類[瀬戸ほか2007]に比定
20	青磁 鎧蓮弁文壺	口径:不明 高さ:(1.0)	B3	外面-綠灰(5G6/1) 内面-綠灰(5G6/1) 断面-灰黄(2.5Y7/2)	精緻	良好	—	残存率不明 口縁部は短く外反する 大宰府分類壺Ⅲ類ないしⅣ類[太宰府市教委2000、山本2022]に比定

第2表 採集遺物観察表 (1)

報告書番号	種類	法量 (cm <sup>3</sup> g)	出土地区	色調	胎土	焼成	文様・製作技術・焼成技術など	備考
21	青磁細蓮弁文碗	口径:(11.2) 高さ:(4.9)	B2	外面-明オリーブ灰(5GY7/1) 内面-明オリーブ灰(5GY7/1) 断面-灰白(10YR8/1)	精緻	良好	外面-ヘラ先による細線で蓮弁文を表現	口縁部(約1/6残存) 分厚く高い高台をもつ 上田分類B-IV、小野分類蓮弁文碗C群[上田1982、小野1982]に比定 沖縄分類VI-1類(15世紀末~16世紀前半)の古相[瀬戸2013・2015、瀬戸ほか2007]に相当
22	瓦(平瓦)	長さ:(5.6) 幅:(3.9) 厚さ:2.1	B地区	凹面-灰(N4/0) 凸面-灰(N4/0) 端面-灰白(5Y7/2) 断面-淡黄(2.5Y8/3)	φ1mm以下の黒色粒を含む	良好	凹面-コピキ痕 凸面-ナデ	いぶし瓦
23	瓦(平瓦)	長さ:(7.0) 幅:(6.6) 厚さ:2.5	B1	凹面-にぶい黄橙(10YR7/4) 凸面-淡黄(2.5Y8/4)~浅黄(2.5Y7/4) 断面-浅黄(2.5Y7/4)2	φ1mm以下の長石・黒色粒を含む	良好	凹面-布目痕 凸面-欠損のため調整観察できず	いぶし瓦
24	不明銅製品	長さ:(1.2) 幅:(3.0) 厚さ(棒状部分):0.3 厚さ(板状部分):0.2	B地区	外面-暗灰(N3/0) 内面-暗灰(N3/0)	—	良好	—	断面形態から鋳造品と推定
25	鉛玉	直径:0.8 重量:3.3	B1	灰(7.5Y4/1)	—	—	—	—
26	短冊状鉄製品	長さ:(6.6) 幅:2.2 厚さ(上部):1.1 厚さ(下部):0.6 重量:40.1	B地区	にぶい赤褐(5YR4/4)~黒褐(5YR2/1)	—	—	—	鍛造品 メタル度が高い 残存部分は片刃状を呈すが、刃部か否かは不明 剥離が進み、3枚に分離して本体が露出する 本体は黒褐色を呈す
27	備前焼壺	底径:(14.0) 高さ:(4.4)	B・C中間	外面-灰(5Y4/1) 内面-灰白(7.5Y7/1) 断面-灰赤(2.5YR4/2)	φ1mm以下の長石・黒色粒を含む きめ細かい田土	良好	外面-ナデ 内面-ナデ	底部(約1/10残存) 乗岡編年中世5期(15世紀第3四半期~15世紀末)から中世6期(16世紀初頭~16世紀第3四半期)[乗岡2000]に比定
28	備前焼擂鉢	口径:(27.8) 高さ:(8.8)	C地区	外面-灰褐(5YR4/2)~暗赤褐(5YR3/2) 内面-灰褐(5YR4/2)~暗赤褐(5YR3/2) 断面(外縁)-灰白(7.5Y7/1) 断面(内部)-赤褐(2.5YR4/2)	φ2mm以下の長石を少量含む	良好	外面-ナデ 内面-ナデ・放射状擂目(7条/2.5cm)	口縁部~体部(約1/12残存) 乗岡編年中世5b期(15世紀第4四半期頃)[乗岡2000]に比定
29	瓦(平瓦)	長さ:(6.5) 幅:(6.6) 厚さ:1.8	C地区	凹面-灰(N4/0) 凸面-灰(7.5Y6/1) 断面-淡黄(7.5Y8/3)	φ1mm以下の長石を少量含む	良好	凹面-布目痕のちナデ 凸面-ヘラナデ	いぶし瓦の可能性あり
30	瓦(平瓦)	長さ:(5.2) 幅:(9.3) 厚さ:1.9	C地区	凹面-灰(N4/0) 凸面-灰(N5/0) 断面-灰白(2.5Y7/1)	φ1mm以下の長石を多く含む 赤色粒をわずかに含む	良好	凹面-ナデ 凸面-タタキ目もしくは棒状工具痕	いぶし瓦の可能性あり 凹面には指紋が残る
31	瓦(平瓦)	長さ:(6.2) 幅:(6.0) 厚さ:2.2	C地区	凹面(暗い部分)-暗灰黄(2.5Y4/2) 凹面(明るい部分)-にぶい黄橙(10YR7/4) 凸面-灰白(2.5Y8/2) 断面-浅黄(2.5Y7/4)	φ2mm以下の長石をわずかに含む	良好	凹面-ナデ 凸面-タタキ目もしくは棒状工具痕	いぶし瓦の可能性あり 二次焼成を受けている可能性あり
32	瓦(平瓦)	長さ:(9.8) 幅:(7.2) 厚さ:1.9	C地区	凹面-灰白(5Y8/1) 凸面-灰(7.5Y5/1) 断面-灰白(2.5Y8/2)	φ1mm以下の長石を含む	良好	凹面-丁寧なナデ 凸面-コピキAIに似た条痕	凹面はナデや端面の面取りが丁寧なので、香炉や火鉢の可能性もある 凸面は磨滅が顕著
33	道具瓦または搏	長さ:(12.8) 幅:(7.7) 厚さ:2.0	C地区	凹面または上面-浅黄(2.5Y7/4) 凸面または下面-にぶい黄橙(10YR7/4) 断面-浅黄橙(10YR8/3)	φ1mm以下の長石・黒色粒を含む	やや不良	凹面-右上から左下方 向のナデ 凸面-横方向のナデ	—
34	備前焼壺	口径:— 高さ:(6.3)	D地区	外面-灰白(5Y7/2) 内面-灰(5Y4/1~5/1) 断面-灰白(2.5Y7/1)	φ1mm以下の長石を少量含む	良好	外面-3条1單位のクシガキ直線文 内面-横ナデ	須恵器に近い焼き上がり 外面全体に自然釉(オリーブ灰(10Y5/2))がかかる
35	備前焼擂鉢	底径:(14.4) 高さ:(3.5)	D地区	外面-にぶい赤褐(5YR5/3) 内面-灰褐(5YR4/2) 底面-灰褐(10YR5/2) 断面-灰褐(5YR4/2)	φ2mm以下の石英をごく少量含む きめ細かい田土	良好	外面-ナデ・底部直上 ケズリ・底部未調整 内面-ナデのち放射状擂目・一部指オサエ	底部(約1/6残存) 断面が均一の質感で光沢をもち、田土を用いて作られている
36	瓦(平瓦)	長さ:(4.7) 幅:(6.0) 厚さ:2.0	D地区	凹面-灰白(2.5Y8/2) 凸面-灰(N5/0) 端面-灰黄(2.5Y7/2) 断面-灰白(2.5Y8/2)	φ1mm以下の黒色粒を含む	良好	凹面-ナデ 凸面-磨滅により調整観察できず	凸面に指紋あり
37	瓦(平瓦)	長さ:(5.4) 幅:(6.1) 厚さ:2.1	D地区	凹面-灰(7.5Y6/1) 凸面-にぶい黄(2.5Y6/3) 端面-灰(5Y5/1~4/1) 断面-灰黄(2.5Y7/2)	φ1mm以下の長石・黒色粒を含む	良好	凹面-ナデ・ヘラナデ 凸面-タタキ目	—
38	硯石	長さ:(7.9) 幅:(5.1) 厚さ:(1.6)	D地区	硯面-褐灰(7.5YR5/1) 裏面-灰褐(5YR4/2)	—	—	—	粘板岩と推定 使用による磨滅が顕著

第3表 採集遺物観察表（2）

報告書番号	種類	法量 (cm <sup>3</sup> ・g)	出土地区	色調	胎土	焼成	文様・製作技術・焼成技術など	備考
39	楔形鉄製品	長さ:(4.7) 幅:2.1 厚さ:0.6 重量:21.5	D地区	本体-黒(7.5YR2/1) 鋸-灰褐(7.5YR4/2)～橙(7.5YR6/6)	—	—	—	先端が尖る工具と推定 メタル度が高い 鋸による剥離が進行
40	硯石	長さ:8.2 幅:(4.0) 厚さ:(0.7)	D・E 中間	土色帖にはない色調であるため、写真の 色調を参照のこと	—	—	—	椎行品 粘板岩と推定 裏面は欠損後に砥石として再利用 (擦痕あり)
41	須恵器または 中世陶器 壺	口径:(12.0) 高さ:(3.4)	E2	外面-浅黄(2.5Y7/4) 内面(釉部分)-オリーブ褐(2.5Y4/3) 内面-黄灰(2.5Y6/1) 断面-灰白(2.5Y7/1)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	外面-ナデ 内面-ナデ	口縁部(約1/12残存)
42	土師器 皿(小皿)	口径:(8.4) 高さ:(1.5)	E1	外面-にぶい黄橙(10YR6/3～6/4) 内面-にぶい黄橙(10YR6/3～6/4)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	外面-弱い一段ナデ・ 指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/8残存)
43	土師器 羽釜	口径:不明 高さ:(7.85)	E地区	外面-灰褐(7.5YR4/2)～黒褐 (7.5YR3/2) 内面-にぶい橙(7.5YR6/4)～にぶい褐 (7.5YR5/4)	やや粗 φ1mm以下の長 石・石英を多く 含む	良好	外面-一部平行タタキ 内面-ナデ	残存率不明 播磨型の土師器羽釜 長谷川編年VI期(15世紀後半～16世 紀初頭)[長谷川2007]に比定
44	瀬戸・美濃焼 端反皿	口径:不明 高さ:(2.0)	E2	外面-灰白(5Y7/2) 内面-灰白(5Y7/2) 断面-浅黄(2.5Y7/3)	やや精緻	良好	灰釉・内外面ともに貫 入がみられる	残存率不明 瀬戸・美濃大窯第1段階前半(1480年 代から1530年代後半)[藤澤2001]に 比定
45	唐津焼 丸壺	口径:不明 高さ:(2.6)	E地区	外面-暗めの黄土 内面-暗めの黄土 断面-浅黄橙(10YR8/4)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	—	胎土の色調などから、古手の唐津焼 と考えられる
46	丹波焼 擂鉢	高さ:(4.2)	E地区	外面-灰黄褐(10YR5/2)～褐灰 (10YR4/1) 内面-灰黄褐(10YR5/2) 断面外側-灰黄褐(10YR6/2) 断面中心-褐灰(10YR5/1)	φ1mm以下の長 石を含む	良好	外面-ナデ 内面-ナデのちへラ描 きの摺目あり	残存率不明 1本描きの擂目
47	備前焼 大甕	口径:不明 高さ:(5.2)	E1	外面-にぶい赤褐(2.5YR4/3) 内面-灰褐(5YR4/2) 断面-灰褐(5YR5/2)	—	良好	外面-ナデ 内面-ナデ	残存率不明 重根分類IVB(15世紀前半～16世紀 初頭)[重根2022]に比定
48	青磁 鎬蓮弁文杯	口径:(13.0) 高さ:(1.9)	E地区	外面-綠灰(10GY6/1) 内面-綠灰(10GY6/1) 断面-灰黄(2.5Y6/2)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	—	口縁部(約1/12残存) 口縁部は短く屈曲しまみあげる 大宰府分類灰Ⅲ類ないしIV類[太宰 府市教委2000、山本2022]に比定
49	染付 碗	口径:不明 高さ:(1.5)	E2	外面・内面(染付)・藍 外面(染付以外)・灰白(N8/0) 内面(染付以外)・灰白(N8/0) 断面-灰白(N8/0)	精緻	良好	内面-2条の圈線あり	残存率不明 江戸時代後期のそば猪口と考えられ る
50	瓦質土器 火鉢	口径:不明 高さ:(3.5)	E地区	外面-にぶい黄橙(10YR6/4) 内面-にぶい黄橙(10YR7/4) 断面-にぶい黄橙(10YR7/4)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	外面-底部下端に突 線が1条巡る・ 縁辺部に脚を貼り付 ける	残存率不明 菅原分類深鉢(火鉢)M・N形[菅原 1989]に比定
51	瓦(丸瓦)	長さ:(10.1) 幅:(8.7) 厚さ:3.0	E地区	凹面-灰(7.5Y4/1) 凸面-灰(N4/0～5Y6/1) 断面-灰(10Y5/1)	φ1mm以下の長 石・石英を多く 含む	良好	凸面-不定方向のナ デ 凹面-コビキB	玉縁部が一部残る 厚手 須恵質焼成で大変堅致 他の瓦とは趣が異なる
52	瓦(平瓦)	長さ:(7.6) 幅:(8.9) 厚さ:2.7	E2	凹面-浅黄(2.5Y7/3)、灰(N4/0)、黄灰 (2.5Y6/1) 凸面-灰(10Y4/1)、灰白(7.5Y8/1) 断面-灰白(7.5Y8/1～7/1)	φ1mm以下の長 石を多く含み灰 色砂も少量みら れる	やや 良好	側縁-ナデ 側面-板状工具による 調整	良質の粘土を用いている 厚手 いぶし瓦
53	備前焼 壺	口径:(14.6) 高さ:(2.0)	F地区	外面(口縁部)-褐灰(7.5YR5/1～4/1) 外面(口縁部下位)-灰赤(10R5/2～4/2) 内面-灰白(7.5Y7/1)～灰(7.5Y6/1) 断面(外側)-灰白(2.5Y7/1)～黄灰 (2.5Y6/1) 断面(内側)-灰赤(10R5/2～4/2)	φ1mm以下の長 石・黒色粒を含 む	良好	—	—
54	焼締陶器 無頸壺	口径:(13.5) 高さ:(4.7)	G地区	外面(口縁部)-灰褐(5YR4/2)～にぶい 赤褐(5YR4/3) 外面(口縁部下位)-灰オリーブ(5Y5/3) 内面-黄灰(2.5Y4/1)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	外面-ナデ 内面-ナデ	口縁部(約1/9残存) 外面全体に自然釉(灰オリーブ (5Y5/3))がかかる 備前焼または丹波焼と考えられる
55	土師器 羽釜	口径:不明 高さ:(2.5)	H地区	外面(口縁部)-橙(7.5YR7/6) 外面(錫直下煤付着部分)-黒(10Y2/1) 内面-にぶい黄橙(10YR7/3)	φ1mm以下の黒 色粒・赤色粒を 含む	やや 不良	外面-ナデ・平行タタ キ 内面-ナデ	残存率不明 外縁付着 播磨型の土師器羽釜 長谷川編年VI期(15世紀後半～16世 紀初頭)[長谷川2007]に比定
56	土師器 皿(小皿)	口径:(9.4) 高さ:(3.1)	H地区	外面-黄灰(2.5Y6/1) 内面-灰白(2.5Y8/2)～灰黄(7/2)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	外面-やや強い一段 ナデ・指オサエ 内面-ナデ	口縁部(約1/5残存)
57	青磁 細蓮弁文碗	口径:(13.0) 高さ:(2.5)	H地区	外面-明オリーブ灰(2.5GY7/1) 内面-明オリーブ灰(2.5GY7/1) 断面-灰白(5Y8/2)	精緻	良好	外面-蓮弁文をヘラ先 による細線で表現す る	口縁部(約1/20残存) 蓮弁の劍頭が蓮弁としての単位を意 識せず施文 沖縄分類VI-1類(15世紀末～16世紀 前半)[瀬戸2013・2015、瀬戸ほか 2007]に比定

第4表 採集遺物観察表 (3)

報告書 番号	種類	法量 (cm・g)	出土 地区	色調	胎土	焼成	文様・製作技術・ 焼成技術など	備考
58	染付(青花) 端反盃	口径:不明 高さ:(2.75)	H地区	外面・内面(染付)-藍 外面(染付以外)-明緑灰(10GY8/1) 内面(染付以外)-明緑灰(7.5GY8/1) 断面-浅黄(2.5Y7/4)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	外面-圈線あり 内面-圈線あり	残存率不明
59	染付(青花) 端反碗	口径:不明 高さ:(1.1)	H地区	外面・内面(染付)-藍 外面(染付以外)-灰白(2.5GY8/1～ 5GY8/1) 内面(染付以外)-明オリーブ灰 (2.5GY7/1～5GY7/1) 断面-浅黄(2.5Y8/3)	精緻	良好	—	残存率不明
60	染付(青花) 端反皿	口径:(12.0) 高さ:(1.8)	H地区	外面・内面(染付)-藍 外面(染付以外)-明緑灰(7.5GY8/1～ 10GY8/1) 内面(染付以外)-明緑灰(7.5GY8/1～ 10GY8/1) 断面-にぶい黄橙(10YR6/3～6/4)	精緻	良好	外面-花唐草文	口縁部(約1/10残存) 皿B1群[小野1982]に比定 沖縄6期(15世紀末～16世紀前半) [瀬戸2017]に比定
61	染付(青花) 碁笥底皿	底径:(2.7) 高さ:(1.0)	H地区	外面・内面(染付)-藍 外面(染付以外)-明青灰(5B7/1)より薄 め、灰白(2.5Y8/2) 内面(染付以外)-灰白(2.5GY8/1～ 5GY8/1) 断面-灰白(2.5Y8/2)～浅黄(2.5Y8/3)	精緻	良好	外面-高台部分は露 胎 内面-見込みにねじ花 文	底部(約1/3残存) 皿C群[小野1982]に比定 沖縄6期(15世紀末～16世紀前半) [瀬戸2017]に比定
62	染付(青花) 碁笥底皿	底径:(3.1) 高さ:(2.0)	H地区	外面・内面(染付)-藍 外面(染付以外)-灰白(5GY8/1)、にぶ い黄(2.5Y6/3) 内面(染付以外)-灰白(5GY8/1) 断面-にぶい黄(2.5Y6/3)	精緻	良好	外面-鋸歯文状の芭 蕉文・高台部分は露 胎 内面-圈線2条あり、見 込みにねじ花文	底部(約1/7残存) 皿C群[小野1982]に比定 沖縄6期(15世紀末～16世紀前半) [瀬戸2017]に比定
63	染付(青花) 碁笥底皿	底径:不明 高さ:(1.3)	H地区	外面・内面(染付)-薄い藍 外面(釉がついていない部分)-黄褐 (2.5Y5/4) 外面(それ以外)-灰白(10Y8/1) 内面(染付以外)-灰白(2.5Y8/1) 断面-浅黄(2.5Y7/4)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	外面-鋸歯文状の芭 蕉文・高台部分は露 胎 内面-見込みにねじ花 文	残存率不明 皿C群[小野1982]に比定 沖縄6期(15世紀末～16世紀前半) [瀬戸2017]に比定
64	瓦質土器 火鉢か?	腹径突帯部 分:(20.5) 高さ:(5.1)	H地区	外面-橙(5YR6/6) 内面-明赤褐(5YR5/6) 断面-にぶい黄橙(10YR7/4～6/4)	φ1mm以下の黒 色粒を含む	良好	外面-体部に1条の突 線	腹部(約1/10残存)
65	茶臼	直径:(28.4) 残存器高: (4.6) 重さ:120.0	H地区	外面-にぶい黄(2.5Y6/3) 内面-灰黄褐(10YR5/2) 断面-にぶい黄褐(10YR5/3)	—	—	—	砂岩と推定
66	瓦(丸瓦)	長さ:(6.2) 幅:(6.7) 厚さ:1.6	H地区	凸面-灰(N4/0) 凹面-灰(N5/0～4/0) 断面-灰黄(2.5Y7/2)	φ1mm以下の長 石を少量含む	良好	凸面-指紋残る 凹面-コビキ痕	玉縁部
67	瓦(丸瓦)	長さ:(10.3) 幅:(5.7) 厚さ:2.1	H地区	凸面-黄灰(2.5Y5/1) 凹面-灰(N6/0～5/0) 断面-灰白(5Y7/1)	φ2mm以下の長 石を含む(φ1 mm以下の長石 が多くみられる)	やや 良好	凸面-ヘラナデで仕上 げる・一部ナデの部分 あり 凹面-玉縁はヘラナ デ・一部布目痕あり	玉縁部 凹面のヘラナデ痕跡は厚み調整の為 と考えられる
68	瓦(平瓦)	長さ:(11.9) 幅:(8.3) 厚さ:2.3	H地区	凸面-灰(N4/0) 凹面-灰(10Y4/1) 断面-灰白(10Y8/1)	φ1mm以下の長 石を含む	良好	凹面-コビキA・布目痕 凸面-磨滅のため調 整不明	—
69	土師器 羽釜	口径:(26.0) 高さ:(5.6)	L地区	外面-にぶい橙(7.5YR6/4)～にぶい褐 (5/4) 外面(煤付着部分)-黒(10YR2/1) 内面-にぶい褐(7.5YR5/4)	φ1mm以下の黒 色粒を少量含 む	非常 に良 好	外面-ナデ・平行タタ キと推定 内面-ナデ	口縁部～体部(約1/12残存) 外面煤付着 播磨型の土師器羽釜 長谷川編年VI期(15世紀後半～16世 紀初頭)[長谷川2007]に比定
70	土師器 羽釜	口径:(25.4) 高さ:(4.7)	N地区	外面-にぶい橙(2.5YR6/4) 外面(煤付着部分)-オリーブ黒(5Y3/1) 内面-黄褐(10YR5/8)	φ1mm以下の長 石・石英・赤色 粒・雲母を含む	良好	外面-ナデ・平行タタ キと推定 内面-ナデ	口縁部～体部(約1/24残存) 外面煤付着 播磨型の土師器羽釜 長谷川編年VI期(15世紀後半～16世 紀初頭)[長谷川2007]に比定
71	弥生土器 広口壺または 器台	復元口径:不 明	M・N 中間	外面-にぶい黄(2.5Y6/3) 内面-にぶい褐(7.5YR5/4) 端面-黄灰(2.5Y4/1)より少し濃い 断面-にぶい黄橙(10YR7/4)	—	—	外面-ナデ・端面に竹 管文(6つ以上) 内面-ナデ	残存率不明 在地産の土器
72	弥生土器 壺	底径:(5.6) 高さ:(2.3)	N地区	外面-橙(2.5YR7/6～6/6) 内面-灰(5Y5/1～4/1)	φ7mm以下の長 石を少量含む φ1mm以下の長 石・赤色粒・黑 色粒を多量に含 む	良好	外面-ナデのち指オサ 工 内面-磨滅のため調 整不明	底部(約1/2残存) 在地産の土器
73	弥生土器 壺	腹径:(24.2) 高さ:(6.3)	N地区	外面上側-橙(5YR7/6) 外面下側-にぶい黄橙(10YR6/4) 内面-にぶい黄橙(10YR7/3) 断面-明黄褐(2.5Y7/6)	φ1mm以下の黒 色粒を少量含 む	良好	外面-ハケ目のちミガ キのち6条1単位の原 体を用いて、上から順 に直線文、波状文、直 線文、波状文と交互 に施文 内面-指オサエ	体部(約1/14残存) 在地産の土器

第5表 採集遺物観察表 (4)

### 3. 写真のみの遺物

第48・49図は弥生土器、第50図は古墳時代の須恵器、第51～54図は備前焼、第55図は備前焼以外の陶器、第56図は貿易陶磁の褐釉陶器、第57図は貿易陶磁の磁器、第58図は瓦質土器、第59・60図は瓦、第61・62図は鉄製品、第63図は壁土、第64図は焼土塊、第65図は鉱滓、第66図は石材の写真である。

#### (1) 弥生土器 (第48・49図)

74～80は、胎土や色調から在地産と判断した。採集地点は、74がA・B中間、75がF地区、76がK地区、77がH地区、78～80がN地区である。74は壺の体部片、75は壺の底部片、76は壺または甕の体部片、77は黒斑のある壺の底部片、78は壺の体部片、79は壺の頸部片で沈線が2条みられる。80は高杯の脚端部と考える。

81～88は、角閃石を含む生駒西麓の胎土を用いた中河内産の搬入土器で、いずれも壺の体部片である。採集地点は、81がA地区、82がE(E2)地区、83～88がN地区である。

#### (2) 須恵器 (第50図)

89～91は、古墳時代の須恵器である。89はA・B中間で採集されたもので、ナデの痕跡から杯蓋の可能性が考えられる。90はD地区で採集されたもので、壺の体部片である。91はE(E2)地区で採集されたもので、外面にカキメ、内面に同心円圧痕がみられる。甕または瓶の破片である。これらは、城山・三条古墳群の構成墳に由来する遺物と推定している。



第48図 弥生土器(1)



第49図 弥生土器(2)



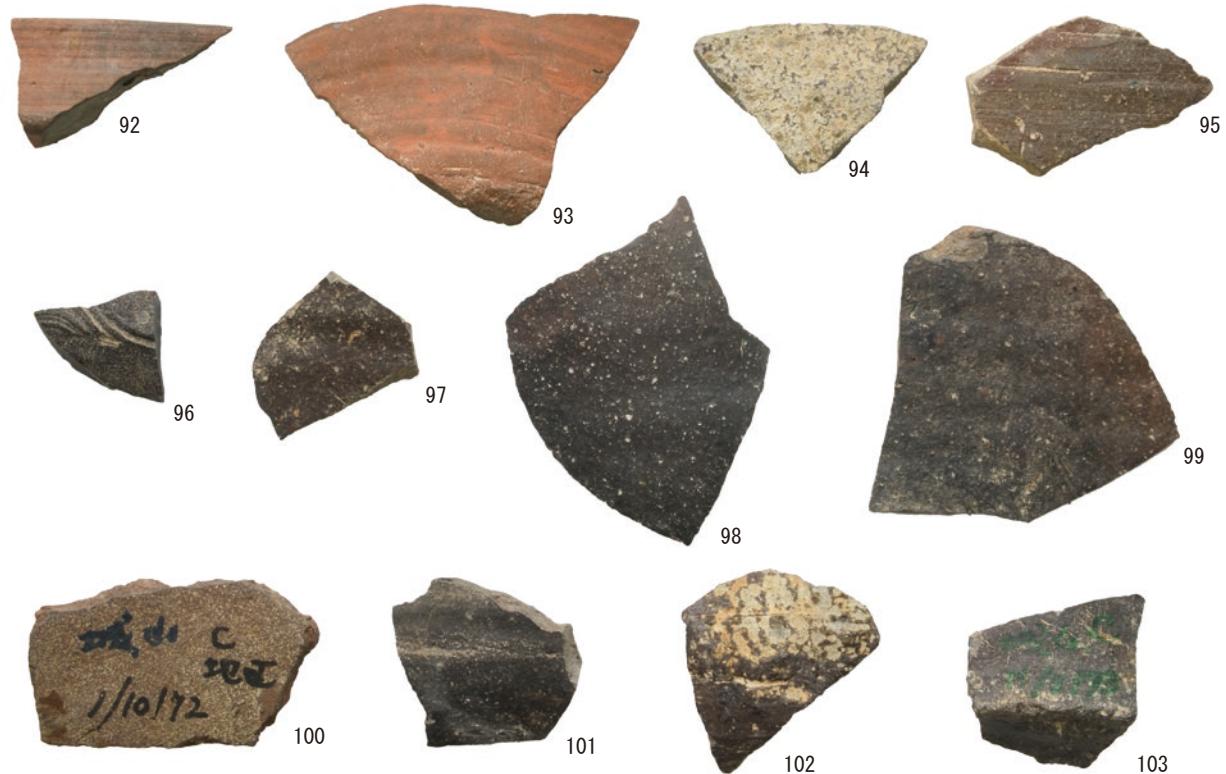
第50図 須恵器

(3) 備前焼 (第51～54図)

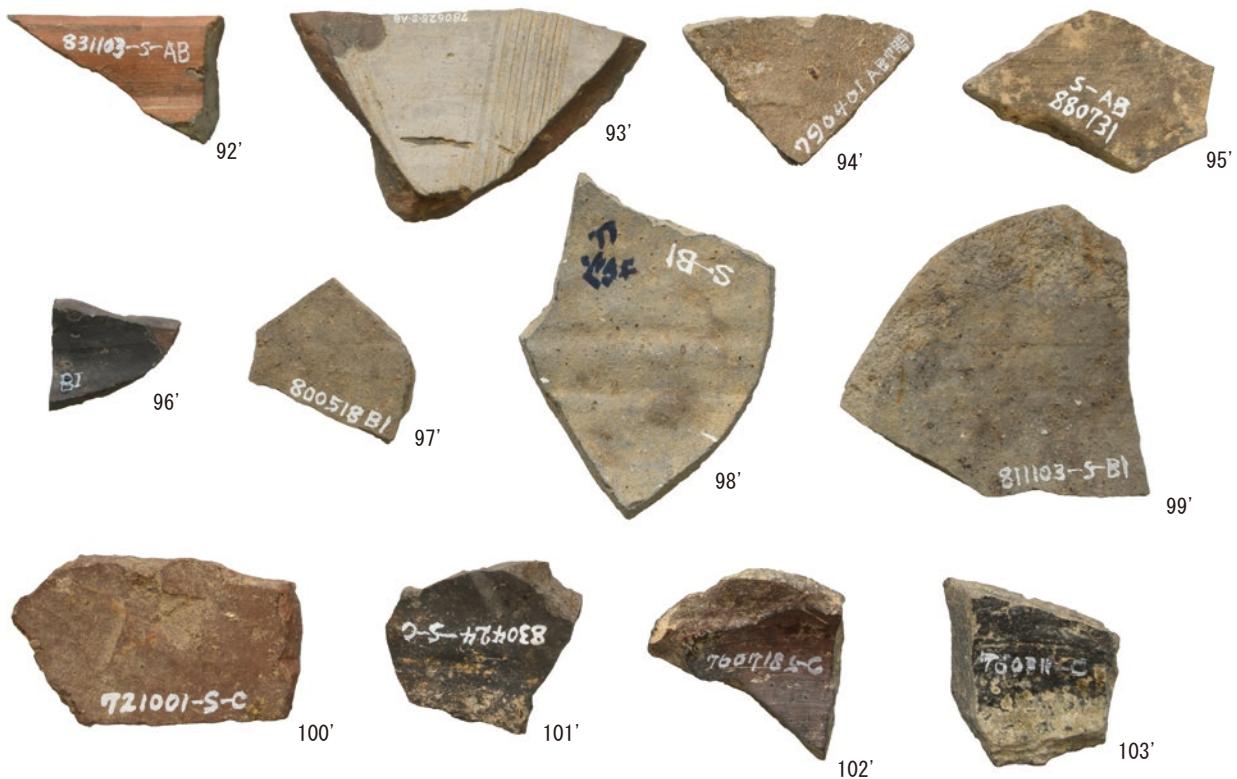
92～95がA・B中間、96～99がB(B1)地区、100～103がC地区、104～111がD地区、112～119がE(E2・E3を含む)地区、120・121がH地区で採集された備前焼である。

92と93は擂鉢である。92は口縁部で、28と同様、明確な薄板状の口縁帯をもつが、端部はナデによる面をもっており、28よりやや新しいと考える。93は底部で、内面に放射状の擂目が2単位みられる。94と95は甕の体部片で、94は灰かぶりである。96は肩部に櫛描文をもつ壺である。備前焼としているが、丹波焼など、他の産地の焼締陶器の可能性もある。97～100は甕の体部片で、このうち98・99は大甕と考える。101は壺または甕の体部片、102は壺の肩部で自然釉がみられる。103は甕の底部片である。

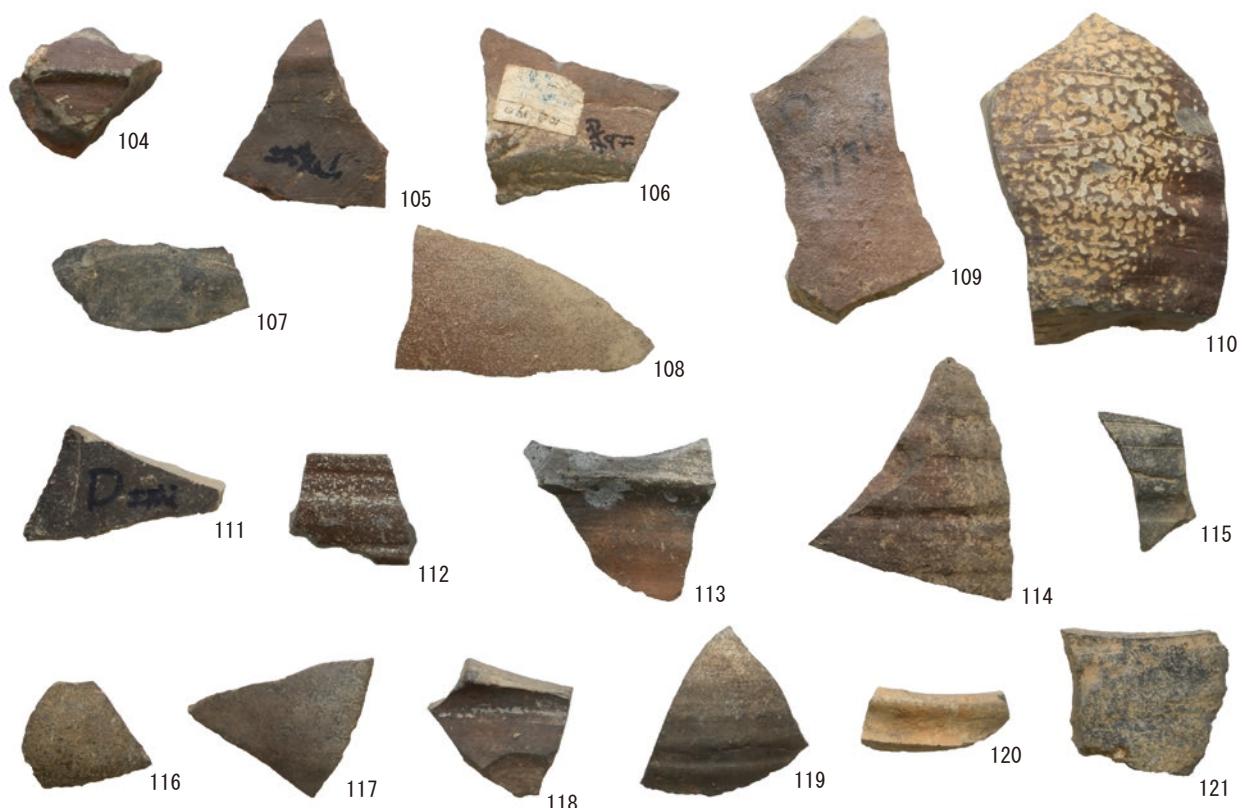
104～107は擂鉢で、104・105が口縁部下部から体部、106が底部、107が体部である。106には放



第 51 図 備前焼 (1) (外面)



第 52 図 備前焼 (1) (内面)



第 53 図 備前焼 (2) (外面)



第 54 図 備前焼 (2) (内面)

射状の撻目 2 単位がみられる。108 は壺の体部、109 は甕の体部、110 は壺または甕の体部、111 は甕の体部と考える。112・113 は撻鉢である。112 は口縁部で、外面にわずかに凹線がみられることから、乗岡編年中世 6 a 期（16 世紀初頭～1530 年頃）〔乗岡 2000〕に比定できる。113 は口縁部下部から体部の破片である。114 は壺または甕の体部、115 は撻鉢の可能性のある破片である。116 は径が小さいことから小壺と考えられる。117・119 は壺の体部、118 は撻鉢の口縁部、120 は壺の口縁部、121 は壺の体部である。

#### (4) 備前焼以外の国産陶器（第 55 図）

122～124 は B 地区、125・126 は D 地区、127 は D・E 中間、128 は E 地区、123～124 は B 1 地区で採集されたものである。このうち、125 は甕の口縁部、128 は撻鉢の体部で、他は壺の体部などと考える。

122・123 は丹波焼と考える。122 は壺の頸部から肩部にかけての破片で、肩部には自然釉が顕著にみられるが、口縁部にかけては一部露胎であり、内面は灰色を呈する。124・126 も、国産陶器と考えているが、内面が褐灰色を呈し、外面に光沢を帯びた褐色の釉がみられることから、褐釉陶器の可能性も考えられる。特に、124 は、中国産褐釉陶器の底部片である 19 に似た釉色である。125～127 は丹波焼と考える。125 は、頸部で大きく屈曲する短い口縁部をもつ甕で、外面から口縁部内面にかけて釉が付着する。長谷川編年 VII 期（15 世紀末～16 世紀前半）〔長谷川 2022〕の甕 B 2 に相当すると考える。127 は内面の指オサエが顕著で、外面に細い 1 条の沈線がみられることから丹波焼と考えられる。128 は撻鉢の底部で、内面にヘラによる 1 本描きの撻目がある。暗灰色を呈し、外面に突帶をもつ 129 は、産地は不明である。



第 55 図 陶器

### (5) 貿易陶磁（褐釉陶器）（第 56 図）

130～136 は体部で、いずれも B 地区で採集されたものである。褐薬の残存が良好な面を撮影しており、130～132・136 が外面、133～135 が内面である。外面は褐色で光沢があるが、内面は黄褐色で、部分的に気泡がみえる。なお、今回整理した採集遺物のうち、褐釉陶器の破片は、すべて B 地区で採集されている。

### (6) 貿易陶磁（磁器）（第 57 図）

137～139 は青磁、140 は青花である。137 は、「土橋より南東」で採集されたもので、138 は B（B 1）地区、139 は E 地区、140 は E（E 2）地区の採集遺物である。

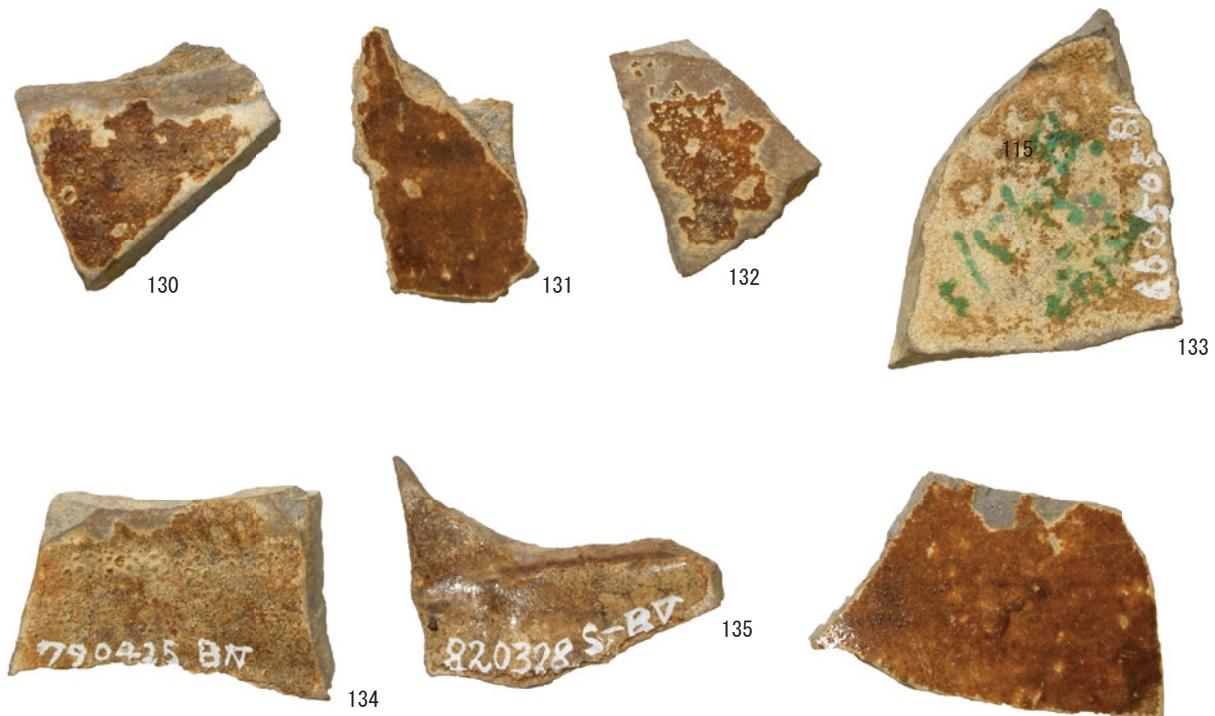
137～139 は碗である。137 は外面が無文で、内面に印花文がみられる。138 は外面に線描きの蓮弁文、内面にも劃花文とみられる文様が施される。139 は外面の貫入が顕著で、線描きの蓮弁文がみられるが、内面は無文のようである。140 は碗または皿で、呉須の色調や断面の様相から、中国産の磁器である。外面の残存部は白磁で、内面に文様がみられる。

137 は沖縄分類の VI—0 類、138 は 21 や 57 と同じく沖縄分類の VI—1 類であり、沖縄 6 期（15 世紀末～16 世紀前半）〔瀬戸 2013・2015、瀬戸ほか 2007〕のものといえる。139・140 も同時期のものと推測でき、いずれも鷹尾城に伴うものと考える。

### (7) 瓦質土器（第 58 図）

141 は B 地区、142 は H 地区、143 は「頂上下」で採集されたもので、いずれも直径の大きな破片だが、器面は磨滅や劣化が進んでいる。

141 は火鉢や風炉の口縁部片または 50 のような火鉢の底部と考えられる。端部外面の小さな突帯が巡り、口端部内面は剥離している。142 は火鉢または風炉である。外面が橙～橙褐色で、内面は被熱によっ



第 56 図 褐釉陶器



第 57 図 磁器

て灰色や橙色に変色している。143 は鉢である。内彎気味に立ち上がる体部に、内側に屈曲して、上部と端部に面をもつ口縁部を有する。菅原分類浅鉢（火鉢）I 形〔菅原 1989〕や、坪之内分類浅鉢IV類〔坪之内 1990〕のように、内彎する低い体部に猫足などの脚部をもつものかもしれない。このような浅鉢について菅原氏は、香炉として用いられた可能性を指摘している〔菅原 1989〕。また、143 に似たもので 16 世紀以降の事例として、底部に脚を貼り付けた同志社キャンパス遺跡出土の火鉢も紹介されている〔菅原 1989〕。

#### (8) 瓦 (第 59・60 図)

144・145 は B (B 1) 地区、146 は B・C 中間、147～149 は C 地区、150 は D 地区、151 は H 地区の採集遺物で、いずれもいぶし瓦である。

144 は平瓦で、凸面は縦方向、凹面は横方向のナデが観察できる。145 は平瓦または道具瓦で、端部に面取りがみられる。146～148 は丸瓦である。薄手の 146 は玉縁の端部で、面取りがみられる。147 は、凸面に縦方向のナデ、凹面に布目痕が残る。148 は凹面側の端部に面取りがみられる。調整は、凹面・



第 58 図 瓦質土器

凸面ともにナデだが、凸面には指紋がある。149は平瓦で、凸面に成形時の離れ砂と考えられる砂の付着がみられる。150は平瓦または丸瓦で、端部に面取りがある。磨滅の顕著な151は平瓦で、釘孔の一部が残り、凹面には横方向のナデまたはコビキ痕がみられる。

#### (9) 鉄製品（第61・62図）

152はA・B中間、153～156はB（153はB1、154～156はB2）地区、157～159はC地区、160・161はE（161はE2）地区、162はL・M中間の採集遺物である。これらの鉄製品は、その種類や年代が不明なものが多い。

152は、縦5.1cm、横6.5cm、厚さ0.4cmを測る板状の鉄製品である。鋸が著しいが、メタル度は高く、長軸方向に緩やかに彎曲している。153～155は鉄釘と考える。153は残存長2.6cmを測り、断面は一辺0.6cm×0.5cmの方形を呈する。また、表とした面には花崗岩の付着がみられる。154は残存長3.6cm、最大幅1.4cmを測り、鋸膨れによる変形が顕著であるが、0.3cm×0.3cmを測る方形の断面をもつ。155は残存長3.1cm、最大幅1.0cmを測り、断面は1辺0.7cm程度の方形である。上半部がつぶれていて、下部は縦方向に節理状に割れており、打撃によって頭部がつぶれたと考える。156は刃物や工具と考える。縦2.7cm、横5.4cm、厚さ0.6cmを測り、長軸、短軸ともに断面形態は低平な山形で、端部は鋭く、メタル度は高い。157は縦2.4cm、横6.0cm、厚さ0.6cmを測る用途不明の鉄製品で、メタル度は高く、断面形態は菱形である。158は、残存長3.2cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmを測る短冊状鉄製品で、剥離が進行している。159は鉄鎌だが、別個体の鎌身が付着している。残存長5.8cm、最大幅2.5cmを測り、手前にみえるのが三角形の板状の鉄片で鎌身の可能性が考えられる。その下の鉄鎌は、平根で三角形の鎌身をもつ。この鎌身は、長さ2.2cm、幅1.35cmで、茎の残存長は3.4cmである。茎の断面は方形で、表面には縦方向の矢柄痕跡が認められる。160も鉄鎌の可能性が考えられるが、鎌身は紡錘形で、159とは形態が異なる。残存長4.0cm、最大幅1.6cmで、茎は0.9cm×0.7cmの方形である。161は、152と同じように彎曲のみられる鉄製品で、メタル度は高い。縦4.2cm、横4.9cm、厚さ0.4cmを測る。残存長5.6cmの162は楔状で、メタル度が高い。左端は幅1.2cm、厚さ0.4cmだが、右端はそれより幅広で厚く、幅2.0cm、厚さ1.2cmである。

なお、個々の重さは、152が56.8g、153が1.9g、154が2.4g、155が2.2g、156が27.2g、157が30.5g、158が2.4g、159が14.3g、160が8.5g、161が32.1g、162が48.1gである。

#### (10) 壁土（第63図）

焼土塊のうち、面をもつものや、スサが確認できたものを壁土と判断した。163はB地区、164～166はE（E2）地区、167～169はF地区、170～174はH地区で採集したものである。これらは、各地区に土壁をもつ建物があった可能性を示すものといえる。

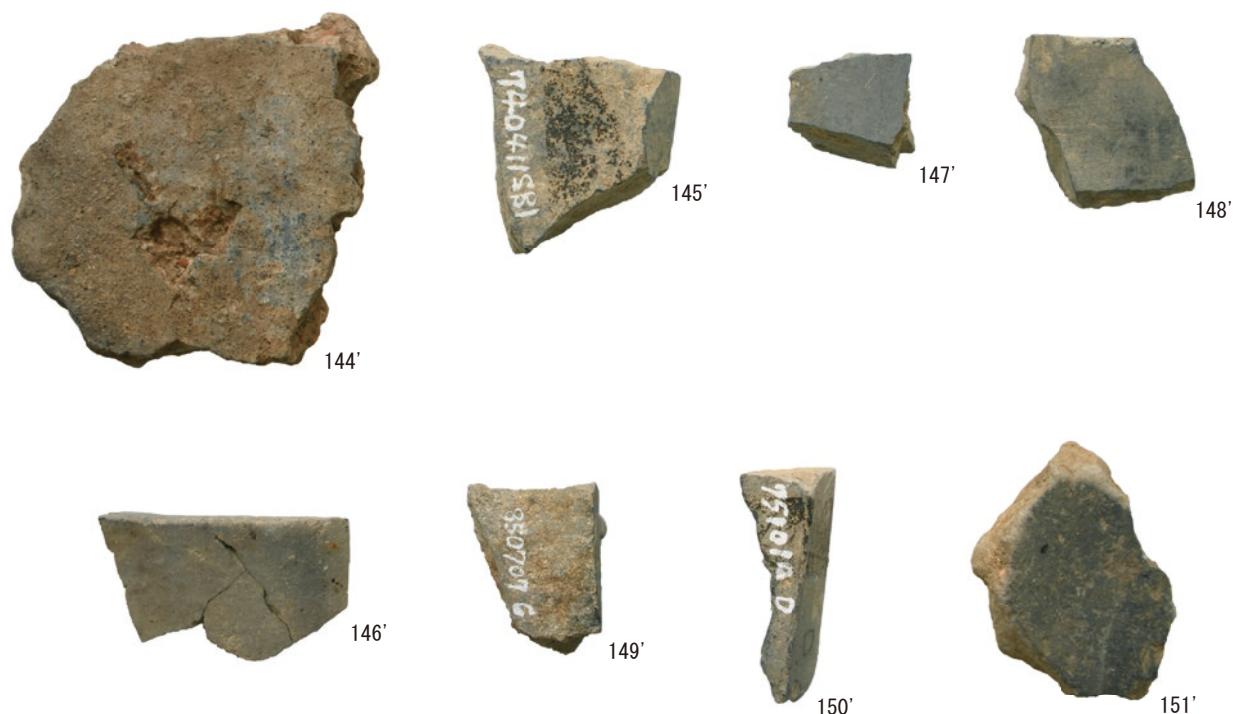
最も大きい163は、縦6.0cm、横6.3cmの大きさで、特にスサの痕跡が明瞭である。

#### (11) 焼土塊（第64図）

175～181は焼土塊で、二次焼成による赤変が顕著である。175・176はB地区、177はC・D中間、178～180はH地区、181は鉄塔での採集遺物である。これらは、土壁をもつ建物が焼失したり、金属器加工用の鍛冶場があった可能性を示すものといえる。



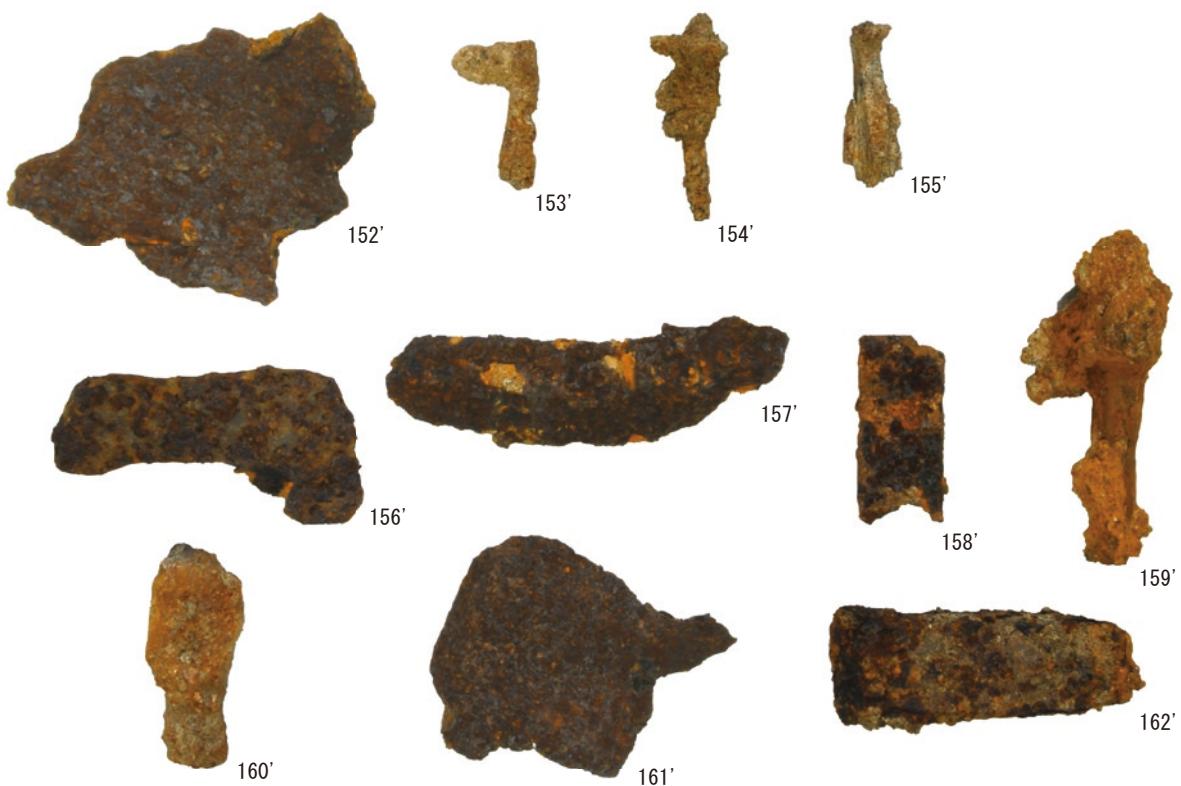
第 59 図 瓦 (凹面)



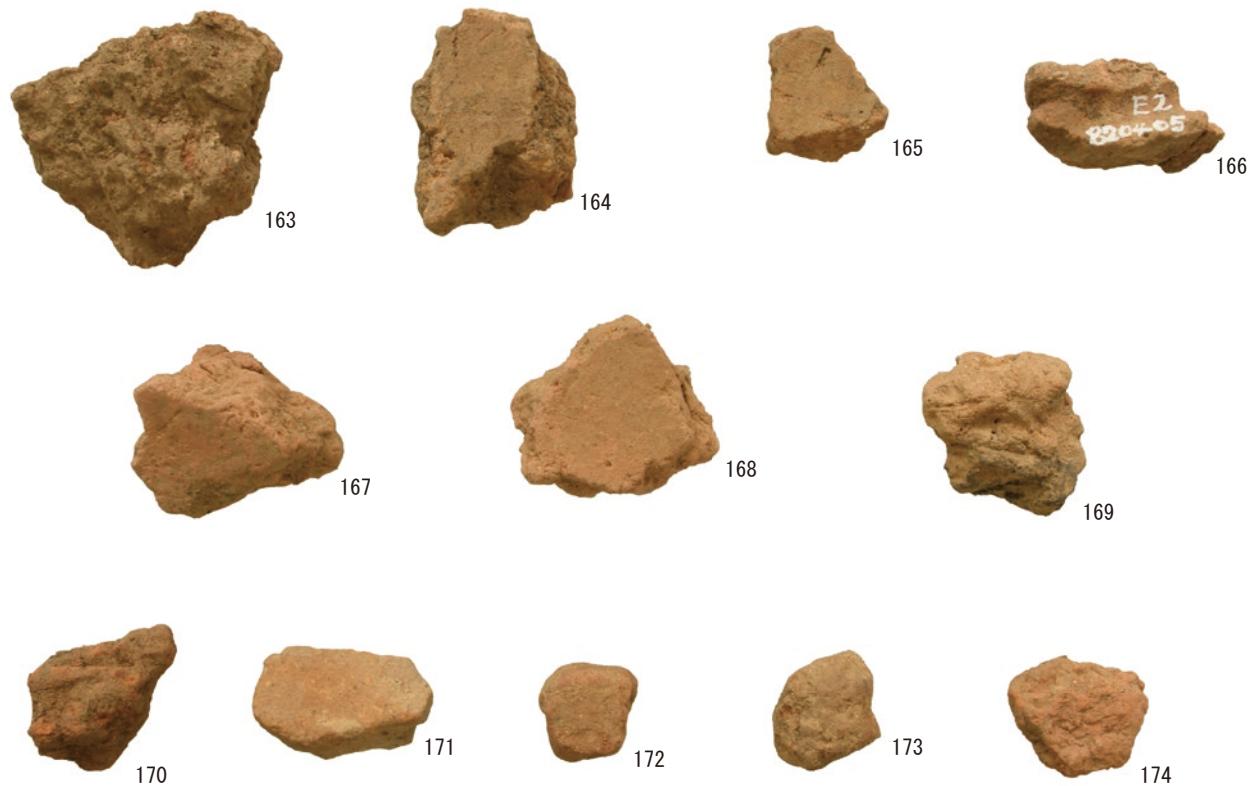
第 60 図 瓦 (凸面)



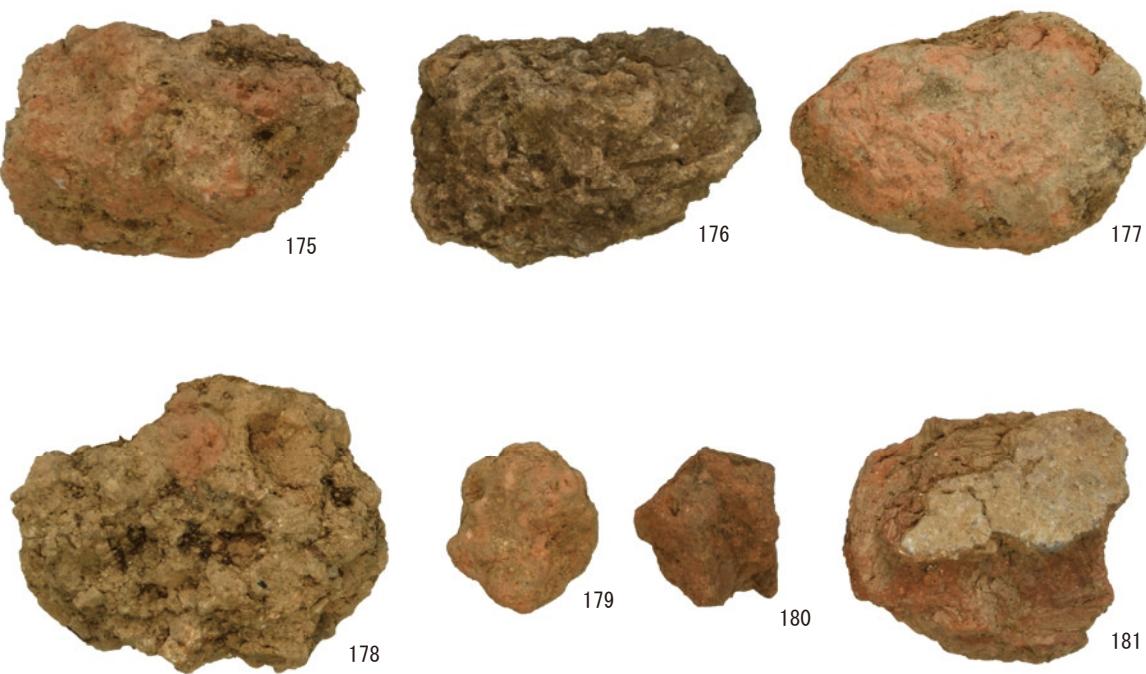
第 61 図 鉄製品（表）



第 62 図 鉄製品（裏）



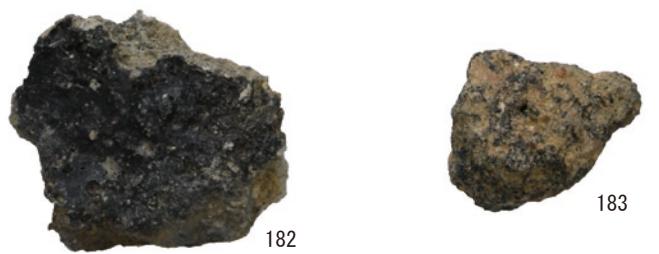
第 63 図 壁土



第 64 図 焼土塊

### (12) 鉱滓 (第 65 図)

182 は L 地区付近の採集遺物で、上面に暗灰色を呈する鉱滓が付着した焼土である。縦・横 4.5 cm を測り、下面是灰～灰黄褐色を呈する。轍羽口や坩堝の破片と考えられる。183 は E (E 2) 地区の採集遺物である。縦 2.6 cm、横 3.3 cm ほどの鉱滓で、上面は褐灰色である。下面是やや軟質で、にぶい黄橙色を呈する部分と、にぶい褐～にぶい赤褐色で硬化の著しい部分に分かれ。これらは、鍛治炉に関連するものと推測するが、鷹尾城に伴うものか、徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群に伴うものかは判断できない。



第 65 図 鉱滓

### (13) 石材など (第 66 図)

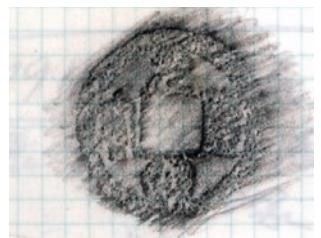
184～186 は B 地区 (184 は B 5)、187 は E (E 1) 地区、188・189 は H 地区で採集された石材などで、184・185・187 が石英 (水晶)、186 がサヌカイト、188 が変成岩、189 がチャートである。石英 (水晶) では、185 に白色や褐灰色のスモーキーの部分がある。六角柱を呈する 187 も、褐灰色のスモーキーの部分がある。186 は縦 2.1 cm、横 2.4 cm の剥片で、弥生時代に石器の材料として持ち込まれた二上山産のものと考える。188 は白色・赤褐色・褐色等の多彩な色調の石材である。189 は縦 1.4 cm、横 1.2 cm の剥片で、186 と同じように、石器の材料として持ち込まれた可能性が考えられる。



第 66 図 石材など

## 4. その他の遺物

山本正男・徹男氏は、今回整理した採集遺物のほかに、E 地区において古銭 2 点を表面採集しているが、阪神・淡路大震災の際に実物の所在が不明となった。このうちの 1 点である元豊通寶については、山本徹男氏が拓影 (乾拓) を記録に残している (第 67 図)。元豊通寶は、1078 年初鋤の北宋銭であるが、寛永通宝鑄造までは通貨として用いられる上に、「16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて、さまざまな本邦模鋳銭 (改造銭) がある。」と指摘されることから、室町時代の遺物とは限らない [永井 1996]。例えば、芦屋市内では、徳川大坂城東六甲採石場に関わると推測される朝日ヶ丘遺跡で、北宋銭または本邦模鋳銭の祥符元寶が出土している [白谷 2012]。したがって、元豊通寶は、室町時代とも江戸時代初頭の遺物ともみることができる。



第 67 図 元豊通寶拓影  
(原寸大)

### 第3節 小 結

本節では、採集遺物についてまとめる。

弥生時代の遺物は、第2章第1節で述べたとおり室町時代に次いで多い。そのほとんどが土器片で、他に石鏃（第20・21図3）や石器素材の可能性のあるサヌカイト片（第66図186）等がみられる。土器片の多くは年代を特定することはできないが、既往の調査・研究から、弥生時代中期後半から後期前半のものと考えられる〔森岡2021〕。弥生土器の採集位置はN地区付近が最も多く、K地区付近、H地区付近が続く（第5図、第1表）。この状況から、弥生時代の遺構は、鷹尾山の山頂付近であるN地区付近を中心にして、城山山頂付近であるH地区付近まで分布していると推定する。また、中河内地域からの搬入土器の破片は、N地区で多く採集されている傾向が認められる。

古墳時代では城山・三条古墳群に伴うと考えられる須恵器の破片がわずかに認められる程度である。なお、現在は消滅しているが、城山遺跡の範囲には2基の横穴式石室墳が存在した（第11図）。このうち、東側の古墳が所在した場所はB地区付近に該当する。西側の古墳は、A地区付近のやや北側に位置し、山本正男氏が戦前に撮影しているが、昭和20年代に破壊されている。

山本正男・徹男氏の2,118点の採集遺物では、室町時代後期の遺物は圧倒的に多い。その内訳は、土師器（皿・羽釜）、瓦質土器（風炉・火鉢）、陶器（皿・壺・甕・擂鉢）、磁器（壺・碗・皿）、瓦（丸瓦・平瓦）、石製品（硯石・茶臼）、鉄製品（鉄釘・鉄鏃ほか）、焼土塊、壁土などである。これらの中、土器類については第4章第2節で後述する。

瓦はB地区、B・C中間、C地区、D地区、H地区で布目痕やコビキ痕、タタキ目がみられるものが採集されており、室町時代後期のものと考える。これらの瓦片からは、鷹尾城に伴う瓦葺の建物があつた可能性が考えられる。

石製品の内、硯石2点（第35・36図38・40）と茶臼1点（第42・43図65）は、時期不明であるが、鷹尾城に伴う遺物とした場合、鷹尾城における文化的な活動を想像でき、第2章第2節で記した連歌に優れていたという文化人としての瓦林政頼の人物像とも結びつく。

金属製品は、その多くが種類や用途が不明な鉄製品であるが、釘（第61・62図153～155）や鏃（第61・62図158・159）、工具や刃物の可能性のある鉄製品（第26・31図26、第35・37・38図39、第61・62図156～158・162）などが認められる。他に1078年初鋤の北宋錢である元豊通寶（第67図）が採集されているが、北宋錢は寛永通寶鑄造までは通貨として用いられており、また、模鋤錢もあることから、鷹尾城に伴うと断定することはできない。

壁土は、B・E・F・H地区付近で採集されており、土壁の建物があつた可能性が考えられる。

B地区、C・D中間、H地区付近では、二次焼成による赤変が顕著な焼土（第64図175～181）も確認されているが、これらの中には鷹尾城が火災にあった際のものが多く含まれていると考える。また、鉱滓が採集していることから、これらの焼土塊の中には鍛冶炉に伴うものも含まれている可能性がある。

これら土器類を含む室町時代後期の遺物は、第5図の城山山頂付近からA地区付近まで、南東方向にのびる尾根上を中心に採集されているということができる。

江戸時代の遺物として明確なものは、唐津焼の丸壺1点（第39～41図45）と染付磁器碗（そば猪口）（第39～41図49）である。これらの内、前者は1620年代の徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群に伴う遺物の可能性がある。また、鉄砲玉である鉛玉（第26・31図25）も、江戸時代の可能性が考えられる。

## 第4章　まとめ

### 第1節　鷹尾城跡に伴う遺物の年代と特徴

第3章で報告したように、城山遺跡で採集された遺物は、鷹尾城跡に伴う室町時代後期のものが圧倒的に多い。それらの内、年代を検討できるものを掲げて、採集遺物の年代についてまとめる。年代を検討できるものとしては、土師器（皿・羽釜）、陶器（皿・擂鉢・壺・大甕）、磁器（碗・皿）がある。

土師器皿は、平底の手づくね成形で、直線的に立ち上がる体部をもつ「皿K」〔中井2022〕が主体を占めており、調整や形態から、小森編年の京X I〔京都X〕期古（16世紀前葉）〔小森2005〕と考えられる。また、羽釜は、口縁部が短く鍔部の退化が進んだ播磨型の土師器羽釜で、体部外面には平行タタキをもつものであるので、長谷川編年のVI期（15世紀後半～16世紀初頭）〔長谷川2007〕に比定できる。

陶器では、備前焼の擂鉢・壺・大甕、丹波焼の擂鉢・甕、瀬戸・美濃焼の皿、貿易陶磁である中国産褐釉陶器の壺がある。

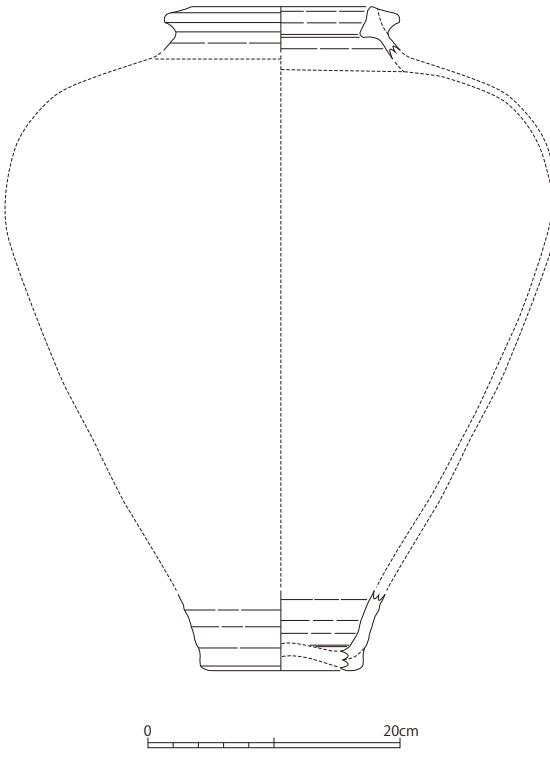
備前焼の擂鉢は、擂目が放射状で、口縁部に明確な薄板状の口縁帯をもつことから、乗岡編年中世5b期（15世紀第4四半期頃）から中世6a期（16世紀初頭～1530年頃）のものである〔乗岡2000〕。壺は、胎土の様相から、乗岡編年中世5期（15世紀第3四半期～15世紀末）から中世6期（16世紀初頭～16世紀第3四半期）のものといえる〔乗岡2000〕。また、甕は、口縁部を外側に大きく折り曲げて断面形が細い楕円形になるように仕上げる

玉縁の形状から、重根分類IV B（15世紀前半～16世紀初頭）に比定できる大甕がある。

丹波焼の擂鉢は、いずれも1本描きの擂目をもつもので、17世紀前半に始まる櫛描きの擂目のもの〔長谷川2022〕より古い。また、甕には、頸部で大きく屈曲して短い口縁部をもつ、長谷川編年VII期（15世紀末～16世紀前半）の甕B 2がある〔長谷川2022〕。

瀬戸・美濃焼では、瀬戸・美濃大窯第1段階（1480年代から1530年代後半）前半の灰釉の端反皿がある〔藤澤2001〕。

中国産褐釉陶器（第26・29・30図18・19など）は、沖縄壺5類〔瀬戸ほか2007〕と考えると、短めの頸部が口縁部方向に窄まりながら立ち上がり、断面方形の口縁部の内端に突起を有するもので、上げ底傾向の底部から肩部に向かって大きく開く形態の壺に復元できる（第68図）。堺環濠都市では、15世紀第3四半期から16世紀中頃の琉球貿易や遣明船貿易に



第68図　中国産褐釉陶器復元図 1/6

よってもたらされた資料と考えられている〔續 2010〕。

磁器は、貿易陶磁の青磁と青花である。青磁では、線描きで蓮弁文を表現する細蓮弁文碗（上田分類B—IV、小野分類蓮弁文碗C群）〔上田 1982、小野 1982〕が、沖縄分類VI—1類（15世紀末～16世紀前半）〔瀬戸 2013・2015、瀬戸ほか 2007〕に相当する。内面に印花文がみられる無文碗は、沖縄分類のVI—0類なので、沖縄分類VI—1類と同様に沖縄6期（15世紀末～16世紀前半）のものである〔瀬戸 2013・2015、瀬戸ほか 2007〕。

青花は、皿B 1群の端反皿〔小野 1982〕や、碁笥底の皿C群〔小野 1982〕がある。これらも、沖縄6期（15世紀末～16世紀前半）に比定される〔瀬戸 2017〕。

このように、年代を検討できる遺物は、概ね、15世紀後半～16世紀前半に集中している。一方で、今回の中世遺物の中には、16世紀半ば以降に下ることが確実視できる遺物は認められない。したがって、あくまでも採集遺物に限っての推測という前提であるが、採集遺物の年代は永正8年（1511）頃に築城された鷹尾城の年代と一致しているといえる。さらに踏み込むと、鷹尾城が16世紀後半（室町時代末・織豊期）まで存続した可能性は低いことができる。

なお、瓦林政頼が永正12年（1515）頃に越水城（西宮市）を築城後、そこに居城し、鷹尾城を支城としたことから〔角田 1981・2011 等〕、鷹尾城は支城としてのイメージが先行していた。しかし、今回の山本正男・徹男氏による表面採集遺物の整理によって、京都系の土師器皿や大甕を含む大量の備前焼、中国産褐釉陶器を含む貿易陶磁類、瓦など、多様・多彩な遺物は、鷹尾城の性格やイメージに再考を迫るものである。これは、山上雅弘氏が「城山の城郭遺構の規模からみて在地の領主クラスのものと思われる」と記されているとおり〔山上 1982〕、鷹尾城が小規模な城郭ではないことを実証する整理結果であると考える。

## 第2節 今回の整理成果

本書では、山本徹男氏に協力を得て、山本正男・徹男氏が城山遺跡（鷹尾城跡）で表面採集されてきた遺物を整理し、本遺跡について重要な成果を明らかにすることができた。具体的には、次のとおりである。

- ①山本正男・徹男氏の城山遺跡における表面採集遺物は、室町時代後期が主体で、次に弥生時代中期後半～後期前半、わずかに古墳時代や江戸時代、近現代のものが認められる。
- ②弥生土器の破片の採集位置からは、弥生時代中期後半～後期前半の高地性集落がN地区付近を中心として城山山頂から鷹尾山山頂（第11図のH～N地区）あたりに分布していると推定することができる。
- ③弥生土器では、生駒西麓産胎土をもつ中河内地域からの搬入品（壺の体部）の破片が数多く認められる。
- ④中世遺物の年代は、土師器皿や陶磁器の編年にに基づき採集遺物が15世紀後半～16世紀前半と考える。採集遺物に限って言及できるという前提ではあるが、この年代はちょうど鷹尾城が築城された永正8年（1511）年頃に対応していると言える。さらに、それ以前に山岳寺院や城郭等の施設はなかったことと、鷹尾城が16世紀前半に廃城したと推測できる。
- ⑤27ℓ容量コンテナで8箱分の表採遺物の大半は鷹尾城跡に伴う室町時代後期のものであり、山城で採集された遺物としては比較的多い。

- ⑥鷹尾城跡に伴う室町時代後期の遺物は、城山山頂とそこから南東へのびる尾根沿い（第11図のA地区～城山山頂）を中心に採集されている。
- ⑦中世遺物の中には瓦や土壁の破片が認められることから、鷹尾城には瓦葺きや土壁の建物があったと考えられる。
- ⑧鷹尾城跡に伴う遺物の中には、褐釉陶器をはじめとする輸入陶磁器が認められる。
- ⑨鷹尾城跡に伴う遺物の中には、硯石や茶臼等の遺物が含まれていることから、鷹尾城に居城した人物らが鷹尾城で文化的な活動を行なっていたと推定する。

#### 謝辞

最後に、これまで山本正男氏と一緒に長い年月をかけて城山遺跡で遺物の表面採集を続けてこられ、それらの遺物を整理させてくださった山本徹男氏に深く感謝を申し上げます。

## 引用・参照文献

- 芦屋市教育委員会 1964 『会下山遺跡』村川行弘・石野博信 編
- 芦屋市教育委員会 1985 『増補 会下山遺跡』村川行弘・石野博信・森岡秀人 編 奈良明新社
- 芦屋市役所 1971 『新修 芦屋市史』本篇 武藤誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編
- 芦屋市役所 1976 『新修 芦屋市史』資料篇1 武藤誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編
- 網干善教・米田文孝・山口卓也 1985 「山芦屋遺跡（S 4 地点）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和 57 年度』兵庫県教育委員会
- 有坂隆道 1971a 「戦国の世と芦屋地方」『新修 芦屋市史』本篇 武藤誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 芦屋市役所
- 有坂隆道 1971b 「文学にあらわれた芦屋と中世の遺物」『新修 芦屋市史』本篇 武藤誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 芦屋市役所
- 家塚智子 2008 「戦国時代の本庄地域」『本庄村史』歴史編一神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ一 本庄村史編纂委員会
- 伊野近富 1995 「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 大庭重信・清水和明 2010 「徳川初期の大坂城・城下町の出土陶磁器の現状と課題」『関西近世考古学研究』18 『消費地からみた国産陶磁器の出現と展開』関西近世考古学研究会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2
- 関西大学山芦屋遺跡発掘調査団 1983 『山芦屋遺跡 S 4 地点の発掘調査概要』 芦屋市教育委員会
- 北野隆亮 2017 「根来寺遺跡出土の半円柱形鉛インゴットと鉛製鉄砲玉」『紀伊考古学研究』第 20 号 紀伊考古学研究会
- 神戸市 2021 『松原城跡発掘調査報告書』佐伯二郎・小野寺洋介・萱原朋奈 編
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀』京都編集工房
- 堺市博物館 2022 『人とモノが行き交う中世・堺—流通の考古学—』
- 佐藤亜聖 2022 「土器から見た中世後期の大坂湾流通」『人とモノが行き交う中世・堺—流通の考古学—』堺市博物館
- 重根弘和 2022 「備前」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社
- 萱原正明 1989 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 19 集 国立歴史民俗博物館
- 瀬川芳則・森岡秀人 1987 「城山古墳群・山芦屋遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和 59 年度』兵庫県教育委員会
- 瀬戸哲也 2010 「沖縄における 12～16 世紀の貿易陶磁—中国産陶磁を中心とした様相と組成—」『貿易陶磁研究』No. 30 日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸哲也 2013 「沖縄における 14・15 世紀中国陶磁編年の再検討」『中近世土器の基礎研究』25 日本中世土器研究会
- 瀬戸哲也 2015 「14・15 世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』No. 35 日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸哲也 2017 「沖縄出土貿易陶磁の時期と様相」『第 35 回中世土器研究会「貿易陶磁器研究の現状と土器研究」<資料集>』日本中世土器研究会
- 瀬戸哲也・新里亮人 2022 「琉球列島」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城 靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究」『紀要 沖

- 繩埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』<太宰府市の文化財第49集>山本信夫 編
- 田中眞吾 編 1988 『六甲山の地理—その自然と暮らし—』神戸新聞出版センター
- 續 伸一郎 1990 「堺環濠都市遺跡出土の貿易陶磁（1）—出土陶器の分類を中心として』No.10 日本貿易陶磁研究会
- 續 伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 續 伸一郎 2010 「堺環濠都市遺跡における『南蛮貿易』期の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』No.30 日本貿易陶磁研究会
- 續 伸一郎 2022a 「中世後期の貿易陶磁」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社
- 續 伸一郎 2022b 「琉球王国と堺～考古学から見た琉球貿易～」『人とモノが行き交う中世・堺—流通の考古学—』堺市博物館
- 角田 誠 1981 「鷹尾城」『日本城郭大系』第12巻 大阪・兵庫 新人物往来社
- 角田 誠 2011 「鷹尾城」『ひょうごの城』橋川真一・角田誠 編 神戸新聞総合出版センター
- 坪ノ内 徹 1990 「中世南都の瓦器・瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
- 中井淳史 2022 「土師器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社
- 永井久美男 1996 『日本出土錢總覽』1996年版 兵庫埋蔵錢調査会
- 中西裕樹 2019 『戦国摂津の下剋上 高山右近と中川清秀』<中世武士選書第41巻> 戎光祥出版
- 西宮市役所 1959 「瓦林正頼の活動」『西宮市史』第一巻 魚澄惣五郎 編
- 新田和央 2022 「瓦質土器（火鉢・風炉）」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社
- 野田泰三 2010 「細川京兆家の分裂抗争と西摂地域」『新修神戸市史』歴史編II 古代・中世 神戸市
- 乗岡 実 2000 「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- 白谷朋世 2012 「徳川大坂城東六甲採石場に伴う番所を探して—朝日ヶ丘遺跡出土遺物をヒントに—」『菟原II—森岡秀人さん還暦記念論文集—』
- 長谷川 真 2007 「播磨における土製煮炊具の様相」『中世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
- 長谷川 真 2022 「丹波」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社
- 兵庫県教育委員会 2008 『徳川大坂城東六甲採石場—国庫補助事業による詳細分布調査報告書—』
- 兵庫県立考古博物館 2018 『兵庫山城探訪』
- 藤澤良祐 2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通—研究の現状と課題—」『シンポジウム 戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品—東アジア的視野から—』(資料集) 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 三杉隆敏・榎原昭二 編 1989 『陶磁器染付文様事典』柏書房
- 武庫川女子大学考古学研究会 1984 『兵庫県芦屋市 旭塚古墳—表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証—』
- 村川行弘 1959 「芦屋城山遺跡調査概報」『芦屋市文化財調査報告』第1集 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1986 「三条岡山遺跡（第4次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 兵庫県教育委員会
- 村川行弘・森岡秀人 1976a 「(口) 城山遺跡」『新修 芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 村川行弘・森岡秀人 1976b 「(ハ) 城山南麓遺跡」『新修 芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 森岡秀人 1981a 「城山古墳群第4・10号墳緊急発掘調査」『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1981b 「山芦屋遺跡N地点緊急発掘調査」『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1981c 「山芦屋遺跡S1地点緊急発掘調査」『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1985a 「山芦屋遺跡（S3地点）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度 兵庫県教育委員会

- 森岡秀人 1985b 「城山南麓遺跡A地点」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986 「城山古墳群第17号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988 「三条岡山遺跡（第5次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和60年度 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 2021 「表六甲における群棲連動と城山遺跡【兵庫県芦屋市】」『季刊考古学』157 高地性集落論の新しい動き 雄山閣
- 森岡秀人・祭本敦士 1985 「兵庫県芦屋市城山山頂高地性遺跡N地点堅穴状断面採集の弥生土器」『郷土史料室だより』'85 2—3月わすれなぐさ号 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・祭本敦士・佐伯二郎 1985 「芦屋市城山採集の近江系土器—第1報の補遺」『郷土史料室だより』'85 夏一ゆり号 芦屋市教育委員会
- 森村健一 2018 「堺出土の東南アジア陶磁と朱印船堺海商」『中近世陶磁器の考古学』第九巻 雄山閣
- 山上雅弘 1982 「鷹尾山城現状レポート」『地域史研究 芦の芽』35 芦の芽グループ
- 山本三郎 2001 「城山遺跡群（鷹尾山地点）」『平成12年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 山本信夫 2022 「中世前期の貿易陶磁器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編 真陽社

## 芦屋市文化財調査報告目録

- 第1集 『芦屋市史追録』第1号 有坂隆道 編 村川行弘 著 1959年刊行
- 第2集 『大阪城と芦屋』村川行弘ほか 編 1962年刊行
- 第3集 『会下山遺跡』村川行弘・石野博信ほか 編 1964年刊行
- 第8集 『朝日ヶ丘繩文遺跡 会下山弥生遺跡』藤井祐介・森岡秀人 編 1974年刊行
- 第10集 『三条岡山遺跡』森岡秀人 編 1979年刊行
- 第12集 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）』森岡秀人 編 1980年刊行
- 第14集 『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』森岡秀人 編 1986年刊行
- 第16集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』森岡秀人 編 1988年刊行
- 第24集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世 編 1993年刊行
- 第27集 『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査—概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点）芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点）月若遺跡（第20・25・28・30・33地点）打出岸造り遺跡（第1地点）打出小槌遺跡（第17地点）金津山古墳（第9地点）久保遺跡（第15地点）山芦屋遺跡（S8地点）』森岡秀人・木南アツ子 編 1996年刊行
- 第36集 『三条岡山遺跡—第11地点発掘調査概要—』渡辺 昇 編 1998年刊行
- 第40集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』森岡秀人・竹村忠洋 編 2001年刊行
- 第53集 『三条岡山遺跡 第3地点発掘調査報告書（1981発掘記録）—中枢地区北部隣接地の様相と出土遺物—』森岡秀人 編 芦屋市教育委員会・三条岡山遺跡発掘調査団 2005年刊行
- 第60集 『徳川大坂城東六甲採石場IV 岩ヶ平石切丁場跡—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果—』森岡秀人・坂田典彦 編 2005年刊行
- 第64集 『徳川大坂城東六甲採石場VI 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点—平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業—』森岡秀人・竹村忠洋 編 2007年刊行
- 第65集 『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—城山南麓遺跡（C・D地点）西山町遺跡（第7地点）芦屋廃寺遺跡（第71地点）六条遺跡（第13地点）津知遺跡（第24・31地点）打出岸造り遺跡（第32地点）四ツ塚（第7地点）うの塚（第1地点）』森岡秀人・竹村忠洋 編 2007年刊行

- 第71集 『芦屋川水車場跡発掘調査報告書—城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査成果—』竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年刊行
- 第77集 『旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書—第1・2次確認調査結果の概要と多角形終末期横穴式石室墳の保存調査—』森岡秀人・坂田典彦 編 2009年刊行
- 第78集 『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果— 城山南麓遺跡（E・F・G地点） 冠遺跡（第23地点） 芦屋廃寺遺跡（第81・88地点） 月若遺跡（第74地点） 寺田遺跡（第144地点） 津知遺跡（第123・187地点） 打出岸造り遺跡（第38・39地点） 久保遺跡（第47・48地点） 打出小槌遺跡（第36・37地点）』森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2009年刊行
- 第79集 『平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第191地点） 山芦屋遺跡（S14地点）』森岡秀人・竹村忠洋・守田めぐみ 編 2009年刊行
- 第80集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2009年刊行
- 第82集 『三条岡山遺跡発掘調査報告書（第19地点） 一片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群—』白谷朋世 編 2009年刊行
- 第84集 『平成20年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 城山南麓遺跡（K地点） 芦屋廃寺遺跡（第108地点） 月若遺跡（第102地点） 寺田遺跡（第197地点） 岩ヶ平刻印群（第169地点）—徳川大坂城東六甲採石場X—』森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年刊行
- 第85集 『兵庫県芦屋市 会下山遺跡確認調査報告書—遺跡分布範囲の確認を目的とした第8～10次発掘調査の成果—』森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2010年刊行
- 第103集 『平成26年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 八十塚古墳群（第154地点） 寺田遺跡（第227地点） 山芦屋遺跡（S18地点）』竹村忠洋・西岡崇代 編 2016年刊行
- 第104集 『平成26年度 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 八十塚古墳群第153地点 城山・三条古墳群第118地点』白谷朋世 編 2016年刊行
- 第107集 『山芦屋古墳発掘調査概要報告書—兵庫県下有数の大型横穴式石室墳—』森岡秀人 編 2017年刊行
- 第112集 『平成10年度国庫補助事業（1）芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査— 八十塚古墳群（第68地点：岩ヶ平支群第50号墳） 大原遺跡（第35地点） 寺田遺跡（第105地点・第106地点・第109地点） 城山・三条古墳群（第19地点：城山古墳群第18号墳）』白谷朋世 編 2019年刊行

## 報告書抄録

ふりがな	ひょうごけんあしやし しろやまいせき (たかおじょうあと)さいしゅういぶつせいりほうこくしょ
書名	兵庫県芦屋市 城山遺跡（鷹尾城跡）採集遺物整理報告書
副書名	山本正男氏・山本徹男氏による採集遺物の調査
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第 119 集
編集者名	(編集・執筆) 竹村忠洋・森山由香里・白谷朋世 (執筆) 西岡崇代
編集機関	芦屋市教育委員会
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町 7 番 6 号 TEL. 0797-38-2115
発行年月日	2023年（令和5年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	しろやまいせき 城山遺跡	整理担当者	竹村忠洋・森山由香里・ 白谷朋世・西岡崇代		
ふりがな 所在地	ひょうごけんあしやししろやま・おくやま 兵庫県芦屋市城山・奥山				
コード	北 緯	東 経	整理期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
282065	070001	34度44分43秒	135度17分28秒 20200908 ～ 20230308	—	—
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城山遺跡	集落跡 城衙跡	弥生時代 ～ 江戸時代	—	弥生土器・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・石器・石製品・金属製品・壁土・焼土塊・鉱滓	今回の採集遺物は、弥生時代の高地性集落及び室町時代後期の鷹尾城跡に伴うものである。そのほか、城山・三条古墳群と徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群に伴うと推測する遺物も認められる。
要 約	山本正男・徹男氏による城山遺跡（鷹尾城跡）における表面採集遺物（270容量コンテナ8箱分）の整理を行った。採集遺物は、弥生時代中期後半～後期前半の高地性集落に伴うものと、永正8年（1511）頃に築城された室町時代後期の山城である鷹尾城跡に伴うものが大半を占め、遺物の採集位置から、高地性集落と山城の中核を推定することができた。鷹尾城跡に伴う遺物の年代は、概ね15世紀後半～16世紀前半であり、鷹尾城の存続期間を検討する上で重要な情報が得られた。これらの遺物には、褐釉陶器をはじめとする輸入陶磁器も認められる。このほか、瓦や土壁の存在からは、鷹尾城に瓦葺きや土壁の建物があった可能性が、硯石や茶臼からは、鷹尾城に居城した人物らが鷹尾城で文化的な活動を行なっていたことなどが推測できた。				

---

---

芦屋市文化財調査報告 第119集

兵庫県芦屋市  
城山遺跡（鷹尾城跡）採集遺物整理報告書  
—山本正男氏・山本徹男氏による採集遺物の調査—

令和5年（2023）3月31日 印刷発行

発 行 芦屋市教育委員会  
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号  
TEL. 0797-38-2115

編 集 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課  
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号  
TEL. 0797-38-2115

印 刷 株式会社 旭成社  
〒651-0094 兵庫県神戸市中央区琴ノ緒町1丁目5番9号  
TEL. 078-222-5800

---



# **Ashiya Archaeological Record 119**

**2023.3**

**Ashiya City Board of Education , Japan**